四国をめぐる旅

髙野敦志

目次

十六歳の修学旅行　1
瀬戸大橋を渡る　40
崇徳上皇の霊廟　44
屋島は島にあらず　50
鳴門の渦潮に近づくと　55
室戸岬の霊場　63
追憶の高知　70
四万十川の清流は　82
ひっそりとした柏島　88
みんなそろって道後温泉　94

三十年ぶりの松山
しまなみ海道を走る
伊予鉄道に乗りまくり
あとがき

141133120109

十六歳の修学旅行

父に日記を書けと言われたのは、中学二年の冬のことだった。それからは多少怠けたことはあるが、天命を知るはずの年が過ぎた今でも、曲がりなりに書き続けている。父方、母方の祖父には会ったことがなく、僕の年には二人とも鬼籍に入っていた。だから、もう余生を送っているようなものだ。

　自分も高校生だったんだなと思うと、不思議な気がする。そんな昔のことを振り返ってどうすると言われそうだ。ただ、日記が残っているから、何があったかたどることはできる。たわいもないことしか書いてないだろうが。

　三十代の頃に四国に行った記録を書き終えた。そこで、初め

て四国に渡った修学旅行についても、書いてみようと思ったのだ。とはいえ、子供の頃の記録だから、事実を羅列してあるだけ、感情を書き殴っているだけで、そのまま書き写すに堪えない。日記を読み返しながら、僕が十六歳、高校二年の修学旅行で感じ取ったことを、今の自分の言葉で書き綴（つづ）ってみたい。

　一九七九年（昭和五四）十月二四日水曜日。朝のうちは雲が多かった。同級生と制服姿で待ち合わせ、東京駅八重洲口に向かった。班ごとに点呼した後、車両に乗り込んだ。午前九時に新幹線ひかり号が出発。車内では雑談したり、トランプをしたりしていた。広島には五時間余りかかった。

　秋晴れのよい天気だった。原爆資料館を見学したのだが、詳

しいことは書かれていない。橋の欄干が焼きつけられた路面、溶けてねじ曲がった鉄骨、熱で炭化した弁当箱のご飯、ケロイド状に焼けただれた背中などは、記憶の中に残っている。井伏（いぶせ）鱒二（ますじ）の『黒い雨』を事前に読んでいたから、どんな状況だったかは、知識としては知っていたが。余りの酷（ひど）さに目を覆うばかりだとしか書いていない。

　その夜は広島のホテルに泊まった。ところが、修学旅行らしくなく、個室に一人ずつ入るように言われた。オートロックのことも分からず、鍵を中に置いたままドアを閉めてしまい、担任のK先生に頼んで開けてもらった。

　夕食の後は、被曝者の女性による講演会が、ホテルの大広間で行われた。原爆投下の惨状について聞いた。空襲警報が鳴っ

て、警報が解かれた後にピカドンが来たこと。爆心地の半径一キロ以内にいた人は、ほぼ全員が死亡したことなど。

それに対して、女子学生の一人が「原爆によって戦争が終わったんだから、やむを得ないことだったのではないか」と問うた。それに対する被曝者の答えは、原爆投下がアメリカの核戦略の発端（ほったん）で、核実験によって地球の周囲に放射能の膜が出来て、我々は知らず知らずに被曝（ひばく）しているというものだった。

原爆が終戦の役に立ったというのは、当時盛んにアメリカ側から流されていた情報で、原爆投下を正当化するものとして、当時の高校生も知らず知らずのうちに洗脳されていた。昭和天皇も「気の毒だったが、戦時中でやむをえないことだった」と述べている。

被曝者の話によって、原爆をめぐる洗脳は解けたのだろうか。実はまだ解けたわけでもなかったようだ。原爆はアメリカが投下したものではなく、日本軍が太田川（おおたがわ）で水上起爆したという説もあるからだ。

その真偽については、判断を留保することにする。原爆という人類を滅亡させかねない兵器に関しては、核戦争後の核の冬について、当時は盛んに喧伝（けんでん）されていた。

とはいっても、講演会が終わった後は、頭の中は別のことでいっぱいになっていた。高校二年生と言えば、最も性欲が盛んな時期である。そんな若者たちを個室に入れたらどうなるか、ちょっと想像すれば分かりそうなものだが。

同級生に呼ばれて、別の個室に行くと、ベッドの上に女の足が載っていた。まずいものを見てしまった。実は、同級生がガールフレンドを呼んでいたのだった。これはその部屋だけの光景ではなかった。あっちこっちの部屋で、男子が女子の部屋に、女子が男子の部屋に入り込んでいた。

廊下では先生たちが歩き回っていたから、僕も巻き添えになりそうで、すかさず逃げ出したが、運の悪い生徒は見つかって、大目玉を食らったらしい。

僕は自分の部屋に戻った。頭がぼんやりして、腕時計をしたまま入浴してしまった。お湯の中で秒針が動いてるのを見て、あわてて腕を出したから、壊れずに済んだのだが。

さて、自分一人になったので、普段は見られないテレビでも

やってないか、チャンネルを回していたら、何とオカマバーの番組をやってるではないか。男のはずなのに、女のように可愛らしいのもいる。整形した胸は、女の物の方が美しいと思ったが。しかも、芸能人が仮装しているのでなく、女になりたくて女装している世界は、生々しい妖気が漂っていた。

「こんな世界もあるんだな」

ベッドに横たわった女の生足（なまあし）の後で、女装した男たちを見たことは、十六歳の少年には余りに刺激的だったようだ。眠っている間も興奮していたらしく、朝目覚めたら……。

六時半に朝食をとり、七時半には出発した。バスで倉敷（くらしき）に向かう。他の生徒は夜遊びが過ぎて、車内で居眠りしている。僕

は昨夜のショックのせいか、気分が悪くなっていた。車窓からは瀬戸内の島々や、高梁川に架かる長大な橋が眺められたが。渋滞にはまったせいで、予定より二時間も遅れ、午後一時に倉敷に着いた。

　倉敷駅に近い料理屋で、刺身やフライの定食を食べた。二時四十五分に大原美術館に入る。岡田三郎助の「イタリアの少女」という絵に、皆の視線が集まった。白いブラウスに茶色いスカートをはいた、金髪の素朴な少女だった。目が澄んでいる。ひたむきなところもある。そばにいるだけで心が癒される可憐さがあった。

　その後、後楽園に向かった。岡山藩主池田綱政が造らせた池泉回遊式の庭園である。一面に芝生が広がり、池のほとりに築山

や茶亭などが点在する。ただ、高校生のことだから、しみじみしたものを感じたなどと、紋切り型のコメントしかできない。他の生徒は庭園を観賞するよりは、互いに記念写真を撮るのに忙しかった。

　当時はまだ本四連絡橋など存在しなかった。四国に渡るには、宇高連絡船に乗る必要があった。宇野と高松を結ぶカーフェリーである。倉敷に着くのが二時間遅れだったから、後楽園でゆっくりする時間はなかった。

　午後四時四十分発の高松行きに乗り込んだ。中央船室に荷物を置き、甲板に出ることにした。瀬戸内の島々を横目に船は進んでいく。振り向くと、ベッドの生足さんと彼氏が、手すりに

もたれかかり、海を眺めつつ語り合っている。辺（あた）りはようやく黄昏（たそがれ）が迫ってきた。他の男子もガールフレンドと肩を寄せ合っている。

「俺たちだけじゃないか、女の人がいないのは」

同級生がぼやいていた。島影が闇に沈む頃、高松港に入港した。一時間の船旅は終わった。

高松の街は信号がほとんど見当たらない。まあ、四十年前のことだから、今はたくさん設置されているんだろうが。途中の道では石垣が見えた。高松城の遺構の一部で、堀は海とつながっていたから、海中に浮かぶ島のように見えたらしい。「讃州（さんしゅう）さぬきは高松さまの城が見えます波の上」と謡（うた）われていた。

さて、その日泊まる旅館の前まで来た。名前からして古めか

しいので、いやな予感がした。古い木造の建物が見えたが、奥の鉄筋コンクリートの建物に入っていったから、良かったと胸をなで下ろしたのも束の間、新館に泊まるのは先生と女子、他のクラスの男子で、僕たちは古い木造に案内されたのだった。

部屋は広いものの、襖（ふすま）はガタガタいってなかなか開かない。床は傷んで畳も傾いており、大通りをトラックが通るたびに揺れる。こんな軋（きし）んだ部屋は初めてで、まるで化け物屋敷のようだった。それでも、床の間（とこのま）がついているから、昔はいい部屋だったんだろう。他の部屋などは、狭い上に窓もなく、壁ははげ落ちて貧乏長屋のようだった。

広島のホテルではオートロックの個室だったが、これではロマンチックなことは起きそうにない。夜遊びが過ぎた僕のクラ

スは、懲罰のためにこんな部屋をあてがわれたのか。
運動部の合宿所じゃあるまいし。みんな不満たらたらだった。だから、夕食を済ますと、勝手に夜の高松に繰り出した。みやげ物屋を見物し、同級生はおみやげのうどんを買っていた。先生に見つからないように、こっそり戻ったのだが、度を過ごした男子は、担任のK先生につかまった。

「おまえ、酒臭いな」

どうやら赤提灯で飲んできたらしい。僕も中学からビールを飲んでいたが、外で教師に咎められるような面倒は起こさなかった。「旅の恥はかき捨て」というが、僕のいた高校では、煙が出ている所がトイレで、文化祭の時もこっそりビールを飲んだりしていた。かといって、ぐれた奴はあまりいなかった。

パンチパーマやリーゼントをして、ボンタンという太いズボンをはいて、バイク乗り回してる奴はいたが。

それは立派な非行じゃないかと言われそうだが、不良ぶってるだけで、根が腐ってる奴はいなかった。卒業して三十数年も経ってるのに、同窓会を開いたら四分の一も集まった。結構仲が良かったんだろう。あの頃は未成年が、酒や煙草、ポルノ雑誌など自動販売機で買えた。いい意味でも悪い意味でも、戦後の昭和時代は自由だった。

合宿所のような部屋で、若い男が十人以上集まれば、大人しく寝ていられるはずもない。猥談が始まり、男女の交わりをジェスチャー交えて説明した。

僕は教室でサド侯爵とか読んでる、アブノーマルな少年だ

ったから、昨夜テレビで見た女装した男たちのこと、笞（むち）で叩いている様子など、洗いざらいしゃべってしまった。純朴な同級生は「こんな所にいたら、気が変になってしまう」と言って逃げ出した。

二時間ぶっ続けで、猥談を話していた。周りの生徒は、ゲラゲラ笑ったり、ニタニタしたりしていた。自分もそうだが、普段真面目（まじめ）一点張り（いってんば）りの少年でも、結構好き者だったりする。

よく晴れていた。午前七時過ぎに朝食。この旅館、部屋も傾いていたが、食事も作り置きみたいに冷たい。高校生なら文句言わないと思ってるからだろう。当時はインターネットなんか存在しなかったし。

七時五十分に出発し、九時十分には栗林（りつりん）公園に到着。高松藩主松平頼重（まつだいらよりしげ）が造らせた池泉回遊式の庭園だが、岡山の後楽園みたいに、芝生が一面に広がってるのとは違う。入り組んだ池には太鼓橋が架かり、松林と多くの築山が、人工による自然美を形作っている。朝もやの中、水面から岩が突き出すさまは、深山（しんざん）に赴（おもむ）いたような気持ちにさせてくれる。

お殿様が夢に見た桃源郷（とうげんきょう）が、今では一般に公開されているというわけだが、「栗林公園」というのに、なぜか栗の木が見当たらない。造園当時は北側に栗の林があったそうだが、十代藩主松平頼胤（よりたね）が、鴨狩（かもが）りのために伐採（ばっさい）してしまったからだという。

案内してくれたのは、バスガイドのおねえさんで、その年

二十歳（はたち）の新人。「ここには白鳥とか鴨とかたくさんいます。集合時間は何時ですか。はい、それじゃ、解散」といった口調で、幼稚園の先生みたいだった。同級生はかわいいと言って、並んで写真を撮っていた。

　午前十時に琴平（ことひら）に着いた。金刀比羅宮（ことひらぐう）の階段の下まで来た。本宮（もとみや）までは七八六段もあるとのこと。案内人のおじさんによると、一段だけ違う段があるそうだ。それを見つけた人は運が開けるという話だった。

　担任のK先生はそれを見つけた。上りは七八六段なのに、下りだけ一段少なくしてある。七八六が「悩む」に通じるので、帰りは一段少なくして「悩みを落とす」のだそうだ。

　上れど上れど石段は続く。ようやく金刀比羅宮本宮にたどり着いた。さらに先には奥宮（おくみや）があるのだが。息をついて本殿に参拝すると、神社だというのに造りがお寺の本堂のように見える。それもそのはずで、江戸時代までは神仏混淆（しんぶつこんこう）の寺院で、「金毘羅船船（こんぴらふねふね）」で謡われた金毘羅大権現（こんぴらだいごんげん）が祀られていた。

　高校生の頃は、廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）のことはよく知らなかった。明治の初めの神仏分離令で、真言宗象頭山松尾寺（しんごんしゅうぞうずさんまつおじ）は廃寺となり、金刀比羅宮という神社に改変された。金毘羅大権現は難を逃れて北海道に渡り、小樽市の金毘羅大本院に祀（まつ）られている。

　バスは山道を走っていた。僕はうつらうつらしていた。吉野川（よしのがわ）をはさんで、対岸に土讃本線（どさんほんせん）が走っている。狭い谷間のかなり

下を流れているので、バスからは水面がなかなか見えない。
そのとき、道路の対向車線から、一群の観光バスが走ってきた。擦れ違う瞬間、バスの中から手を振っていた。実は、僕がいた高校の二年は十クラスあったから、六組以降は僕たちとは反対に、高知経由で広島に向かうことになっていた。
大歩危峡（おおぼけきょう）でバスは止まり、昼食を取ることになった。階段を下りていくと、川沿いに食堂があった。出てきたのはカレーライスだった。下には吉野川の急流が見えた。いい眺めだ。また明日来るんだな。実は僕たちのグループは、翌日の自由行動で大歩危峡をゆっくり探索することにしていたのだ。
ふたたびバスに乗った。クラスのみんなが僕を囃（はや）し立てる。どうやら、昨夜話した猥談（わいだん）が評判になってるらしい。違う部屋

にいたクラスメイトが聞きたがっている。
マイクが回ってきたので、僕は駒田信二（こまだしんじ）編訳『中国笑話集』に載っていた話を紹介した。昔、中国の皇帝が徳のある坊さんを探していた。坊さんたちを裸にして、首にひもをかけると、臍（へそ）のあたりに太鼓を吊（つる）した。円陣を組ませて、中央で美女に裸踊りをさせた。すると、坊さんたちのあそこが太鼓のバチみたいになり、そこら中からポンポン鳴り出した。ところが、ただ一人の坊さんの太鼓だけが鳴らない。これこそ、徳の高い坊さんだということになり、皇帝が宮中に迎えようとして、その坊さんの太鼓を調べさせると……。
後はご想像に任せる。いろいろ話しているうちに、「あっ、間違えた」と言ったら、それだけでバスの中は爆笑の嵐となっ

た。
「ガイドさんが一番受けてるよ」
男子が茶化すと、栗林公園を案内してくれた、あの可愛いガイドさんは、消え入りそうに顔を赤らめていた。とんでもないハレンチ高校生のクラスに、乗車してしまったと思ったんだろう。
担任のK先生もニヤニヤしている。
「高野も案外だな」
それ以来、僕の評価は勉強のできる模範的な生徒から、アブノーマルなヘンタイに変わってしまった。
日本三大鍾乳洞（しょうにゅうどう）の一つ、龍河洞（りゅうがどう）に到着した。高知県の東

部にあり、岩手の龍泉洞（りゅうせんどう）、山口の秋芳洞（しゅうほうどう）と肩を並べる。ここの特徴は、弥生（やよい）時代に住居として使われていたことで、弥生式土器が鍾乳洞の石灰石に包み込まれている。炉の跡や木炭、それに動物の骨なども見つかっている。
午後三時過ぎから、約一時間、鍾乳洞の中を巡ったわけだ。石灰石が溶けて出来た洞窟（どうくつ）は、延長四キロにも及ぶが、通常公開されているのは一キロである。現在は幻想的な光でライトアップされているようだが、当時は蛍光灯の鈍い光だけだったから、天井からつり下がった鍾乳石にも、大して関心を持たなかった。それよりも「もう、意地悪なんだから」と男子生徒に甘える女子の声に、僕らの関心は向いていた。
龍河洞の外には、珍鳥センターがあった。ここでの見ものは、

特別天然記念物の長尾鶏である。尾が切れないように、縦長の箱の中で飼われている。外を歩き回ることは許されない。とにかく、伸びた尾羽を守るために生かされている。美しい尾羽を持ったばかりに、狭い箱の中に幽閉された鶏が哀れだった。

　午後五時五十分に、高知に到着した。新人のバスガイドさんとも、ここでお別れだった。その夜はまともなホテルだったが、大部屋だったことには変わりない。夕食は土佐の皿鉢料理だった。これは大皿に鰹のタタキ、バッテラ、玉子焼き、高野豆腐、魚のフライ、蒲鉾、羊羹などが盛ってあった。魚が苦手な男子がいたので、余計に食べることができた。

　夕食後、きちんと許可を取って外出した。高知駅に出ようと

して、反対側に出てしまったため、路面電車で高知駅前に出た。はりまや橋のあたりも歩いた。「土佐の高知のはりまや橋で、坊さんかんざし買うを見た」で有名だが、川は埋め立てられ、架かっていた赤い橋の欄干が、アスファルトの路面に食い込んでいた。何とも無粋な有様だった。

　商店街や本屋にも寄って帰ってきた。猥談にも飽きていたので、大部屋に戻ると、どうやったら恋人ができるか、同級生と話し合った。

「ラブレター、五枚くらい書けば、一人ぐらい引っかかるかな」

「でも、好きでもない相手に書くのも変だし」

　我慢できない同級生は、隣の男子を女性に見立てて抱きついていた。別に同性愛ってわけではない。一部のカップルに見せ

つけられて、僕らは我慢しきれなくなっていたのだ。

翌日はグループによる自由行動となっていたが、実は、もう少しで中止となるところだった。それというのも、広島のホテルの個室で、男女がハネムーンごっこをしていたことが、一部の教師の逆鱗（げきりん）に触れたからだった。そのために、自由行動をめぐって、先生たちの意見は二分されていた。

教員会議の状況はなぜか、生徒たちにも伝わってきた。その中で、僕らの味方になってくださったのが、担任のK先生だった。一部の生徒の行動を問題視して、連帯責任を取らせることで、一生の思い出となる修学旅行を、悔いのあるものにすべきではないと、主張してくださったらしい。

高校卒業までに習った先生で、このK先生ほど皆に慕われた

先生を知らない。早稲田大学での学園紛争の話や、教師間のいがみ合い、性根（しょうね）の曲がった若者を叩き直したこと、かなりきわどい話まで教えてくださった。卒業して四半世紀経った後も、中年になった生徒たちに会いに来てくださった。教師になった自分が、理想としてきたのもK先生だった。

翌日は六時に起床した。他の生徒はまだ眠っている。僕たち四人のグループは、五十七分の急行に乗ることにした。朝食は抜きで自由行動による見学に出発した。午前中は大歩危峡で遊ぶことになっていた。

ホテルを出て高知駅に向かっていると、一人が急に走りだした。同級生に聞くと、彼は「トイレに行く」と言っていたそう

だ。あの人のことだから、ちょっと心配な気もしたが。班長の僕に断らなかったので、ちょっと面白くなかった。

僕たち三人は駅に着いた。列車はすでにホームに入っていた。時間になったので、三人は列車に乗り込んだ。まさか乗っていないはずはない。階段を駆け下りてくる気配もない。発車ベルが止まり、ドアが閉まった。

「あっ！」

あの人は改札口でぼけっと立っていた。窓から「次の急行で来いよ」と叫んだが、聞こえないようだった。

「改札の所で切符が買えなかったのかなあ」

「買えなかったのかもしれないよ。それにしても、どうしよう。次の急行に乗ってくるかな」

「あの人のことだから、分からないよ。また変な列車に乗られても困るし」

「見捨てるわけにはいかないな。次で降りて戻るか」

携帯電話などない時代の話である。連絡のしようがないし、そもそも、機転が利く人だったら、列車に乗り損なうことなどないだろう。

やむなく、後免（ごめん）駅で下車した。改札係に「ここで降りると、もう急行券使えんで」と言われ、途中下車の印を押してもらった。

「これ、なくさんように、気ぃつけて仲良う持ってきな」

次の下り列車で高知に向かった。各駅停車はのろのろ進む。途中で生徒たちが乗り込んできた。教科書を覗（のぞ）くと、三角関数

を解いている。僕にはさっぱり分からない。
　ようやく、高知駅に戻ってきた。あの人は待合室にいた。「次のので行こうと思った」とけろっしている。
「まあ、大体予定通りに行くんでしょう？」
　それを聞いて、僕たちの怒りが爆発した。
「滅茶苦茶だよ。君が乗り遅れたせいで、みんな千円近く損をしたんだぜ」
「もう大歩危峡に着いてると思ったよ」
「そんな、放っておけるかよ」
　そのとき、待合室のテレビが、朴正熙（パクチョンヒ）大統領の暗殺を報じていた。当時の韓国は軍事政権による独裁体制が続いており、

金大中（キムデジュン）元大統領も反体制運動をしていた容疑で、秘密警察により日本から拉致（らち）され、死刑判決が出されていた。前回の暗殺未遂事件では、朴大統領の夫人陸英修（ユクヨンス）が射殺されていた。二人の娘朴槿恵（パククネ）が大統領になるも、職権乱用と強要の罪で懲役二十四年を言い渡されることなどは、その時には知る由（よし）もなかった。
　弁当を買って、次の急行列車に乗ったが、今度は席が全く空いていない。やむなく、列車の連結部のところにいた。新改（しんがい）は無人駅だが、駅舎には愛想のいい犬が住み着いている。列車から投げられるパンを食べて生きてるらしい。そばには湧き水も出ていて、「この水飲まれん」と書かれていると、同級生が教えてくれた。ただ、スイッチバックして入る駅なので、急行は引き込み線の脇を通過する。

土讃本線はトンネルばかりだった。駅らしい物はなかなか見つからない。そのとき、林の奥まった先に駅舎の屋根が見えた。僕は思わず「新改！」と叫んだ。

　気を取り直した同級生と、買ってきた弁当を食べた。握り飯と、たくあん、昆布の佃煮（つくだに）、それにミカンだったが。朝食抜きだったから、とにかくおいしかった。

　大歩危駅には九時二十二分に到着した。橋で対岸に渡り、吉野川沿いを歩いていく。前日に昼食を取った食堂の、さらに下が船着き場になっている。川船に乗ろうと、階段を下りるところで、あの人が薬を買いに行ってしまった。なかなか戻ってこない。

「遅いな。今度乗り遅れたら、どうするんだろう」と三人で言い合った。切符を買うと、急いでくれと言われ、あわてて乗り込む。すると、あの人が階段を駆け下りてきた。すでに老夫婦が腰を下ろしていた。

　小さな川船はエンジンを起動した。切り立った大歩危峡の間を、ゆっくりと進んでゆく。変成岩による奇岩は、地殻の圧力が大きかったことを示している。吉野川による浸食で露出したわけだが、日本では珍しいということだ。流れは思いの外ゆるやかだった。早瀬に入ったところで、船はUターンした。

　船着き場に戻ってくると、団体客が下りてきた。階段の上から写真に収めた。上りきって道路に出ると、「この川で泳がれん」と書いてあった。さもありなんと思った。流れが静かそう

でも、深くえぐられた淵（ふち）に呑み込まれたら、命はないだろうから。

大歩危駅に戻った。喉（のど）が渇いたので、ジュースを飲んだ。行きに急行券を無駄にしてしまったので、帰りの分を買う気にならなかった。各駅停車の下りが来るまで、一時間四十五分もあった。駅弁を買って食べ、あとはおしゃべりすることにした。大学進学のこととか。

十二時五十分の下り列車に乗った。同級生の勧めで、旧型の客車に移動した。

「そのうち、こういうのはなくなるんだよ」

車内の壁はニスを塗った木製で、床も焦げ茶の木製。終戦直後に走っていた車両のようだ。座席にようやく座れた。皆疲れ

ているらしく、すぐに眠ってしまった。僕は吉野川をずっと眺めていた。

各駅停車だけれども、この列車も新改は通過だった。引き込み線の先に、新改の駅舎が見えた。あそこに犬がいるんだなと思った。そのうちうつらうつらして、疲れも取れてきた。土佐山田で生徒が入ってくるまで、車内は静かだった。

三時十分前に高知駅に戻ってきた。今日は夕食が遅いらしいので、駅構内の食堂に入った。肉丼と味噌汁を注文した。食べ終わる頃には、三時半を回っていた。桂浜（かつらはま）に行くのはあきらめたが、せめて高知城は見たいと言うと、同級生も賛成してくれた。

案内板を見ながら、ようやく天守閣の見える所まで来た。「こんな所、上るの？」と不満も出たが、とにかく前まで行くことになった。天守閣の写真を撮った。中も見たかったが、時間がないので、またの機会にということになった。実際に訪れたのは、それから十五年後のことである。

同級生が「アイスクリン」という看板を見つけて、僕も何だろうと気になった。「班長おごってくれよ」と言われたのだが、「すぐ下りるしかない」とあの人に急かされ、それをいいことに坂道を下っていった。あとで、アイスクリームのことだと知ったのだが。

病気で来られなかった同級生のために、皆で「かわら煎餅（せんべい）」を買った。家族へのおみやげは、尾長鶏の民芸品などにした。

五時十分前に、朝出発したホテル前に戻ってきた。

他の生徒たちも続々と戻ってきた。日が西に傾き、ようやく夕闇が迫りつつある頃、遅れていたバスがやって来た。出発して向かった先は、何と桂浜だった。僕らは明るいうちに、坂本（さかもと）龍馬（りょうま）の像が立つ海岸を訪れたかったのだが、暗くなってから向かうことになるとは。

闘犬センターを見学するということだった。まず、横綱の土佐闘犬が出てきたので、皆は写真に収めた。これが闘うのかと思ったら、土俵に上がってきたのは、若い闘犬二頭だった。凄まじかった。一度首にかぶりつくと、なかなか放そうとしない。しかも、噛（か）まれた方も忍耐強い。ひるむことなく、歯を食いしばっていた。結局、引き分けで終わってしまったが。

桂浜で見たのはそれだけだった。暗い中をバスで移動し、七時半に夕食を取ったのだが、見栄えだけで味がよくなかった。修学旅行もこれで終わると思って、気分がよくなかったからか。

バスで高知港に着いた。船の前で記念写真を撮った。乗船して少しすると、銅鑼（どら）が二度鳴った。九時二十分出港。船室に荷物を置くと、みんなで甲板に出た。船がゆっくり動き出した。

カップルが夜の海を眺めている。沖に出ると外は真っ暗になり、うねりが出てきて船が揺れ始めた。気分がよくないので、甲板にしばらく出ていることにした。はるか彼方に陸の光を見た。波は相当荒くなってきた。眺めていると、吸い込まれるような気がした。

手すりに寄りかかり、ぼうっとしていた。潮風が頬を撫でる。快さにすうっと意識が遠くなる。気がつくと、黒い海が割れて、白い歯をむき出している。

疲れが出たので、船室に戻って横になった。船は縦に揺れるので、進行方向に頭を向けることにした。その方が酔わないらしい。船と一緒に体はうねりを越えていく。

深夜一時頃、目が覚めた。周りはほとんど眠っている。中にはこっそり飲酒している生徒もいたが。海を見に行ったが、はるか沖を走っているらしく、明かりは何も見えない。真横に眠る同級生は、真っ白のジーンズ姿だった。片思いの人のことでも夢に見ているのか。

早朝五時半に目が覚めた。海は霧が立ちこめ、対岸は何も見えない。起き上がると、私服を脱いで制服に着替えた。七時に大阪南港に接岸した。

下船後すぐにバスで新大阪駅へ向かった。大阪の街は見られないようだ。八時前には到着し、一時間余り自由行動となった。今日はK先生の誕生日だった。クラスのリーダーが先生に焼酎を買ったというので、僕らはおつまみを買った。クラスのみんなは、K先生が大好きだからだ。気取らずありのままに、本気で向き合ってくれ、真面目だけれども、よく脱線していた。こんな先生、今まで会ったことがなかったから。

九時に新幹線がホームに入線してきた。二十二分に発車。車内でハッピーバースデーを歌って、K先生に焼酎とおつまみを

贈った。今みたいに小うるさい時代じゃなかったから。朝食の幕の内弁当を食べた後、しばらくおしゃべりしていたが、そのうち皆うとうとし始めた。

東京駅には十二時三十二分に到着。点呼してすぐに解散となった。同級生と中央線に乗り込んだ。ゴミ箱で拾った「朴大統領射殺」の新聞を二人で見ていた。彼に北海道で旅した時のことを聞いた。朝食はパンと牛乳、昼食は食堂、ぜいたくしなければ、旅費は五万円程度。一日中列車に乗っていると、自分のうちのような気がするなど。

当時は急行「八甲田」で青森まで半日近く揺られ、さらに青函連絡船に乗っての旅だった。北海道は僕らには別世界だった。自分も大学生になったら、ぜひ長旅をしたいと思ったものだ。

瀬戸大橋を渡る

僕がまだ三十一歳のとき、四国一周する旅に出た。新幹線で岡山駅に着くと、時間が中途半端だったので、福山行きの快速電車に乗った。倉敷に寄ってみたかったからである。

蔵が建ち並ぶ美観地区までは、一キロほどあった。堀では白鳥が三羽、水中に首を突っ込み、餌を探していた。川岸に茂る柳は、枝を左右いっぱいに広げて、対岸の家並みがよく見えない。石橋の上に立ってみたが、事情は変わらない。

古めかしい土蔵の前に、人が大勢集まっている。門の中を覗くと、大原美術館であることに気がついた。高校二年生、十六歳のとき、修学旅行で訪れたので、土色の壁には記憶があった。

あの日は中を見学して、美少女の絵に見とれた同級生を、皆でからかったりしたものだが。高校の同級生とは、卒業してからは会っていない。皆どうしているんだろう。思い出にひたっていたわけだが、今回はゆっくり見て回る時間がない。

鷲羽山のユースホステルに泊まった。食堂からの眺めが素晴らしい。手前の細長く見えるのが松島である。狭い海峡を緑色の水が、たぎるように流れている。

瀬戸大橋のうち、一番手前の下津井瀬戸大橋は、右方の櫃石島に架かっている。大橋はゆるやかなカーブを描きながら、平らな路面を彼方へ伸ばし、凪いだ海に浮かぶ島々を踏みしめて、対岸の工場地帯に連なっている。

二階建ての橋の下を、瀬戸大橋線の電車が駆け抜けていく。空中を走る列車といった感じである。鉄道が吊り橋を進むこと自体、あり得ないことではないか。島々の風光と対照的な瀬戸大橋は、注ぎ込まれた英知が築いた無類の雄大さで、大自然と渡り合っている。今や島々をつなぎ止める鎹（かすがい）となっていた。

　瀬戸内海を見た昔の中国人は、「日本の河もなかなかやりますなあ」とつぶやいたという話を、小学生のときに先生から聞かされた。確かに、中国大陸の大河などは、小舟で渡るのに一時間もかかったりするから、瀬戸内海を河と見間違えたというのも、あながち冗談だとも言い切れない。

　本州・四国・九州を貫く中央構造線が、西にずれていくこと

で、山と海抜以下の平地が生まれた。ナウマン象の生息する湿地の楽園は、四国と淡路島の間に鳴門海峡（なるとかいきょう）ができたことで、太平洋の膨大な水が流れ込み、山々を残して沈んでいった。それが瀬戸内海誕生の秘密だという。

　いよいよその絶景を、鉄道で渡る瞬間が近づいてきた。児島（こじま）駅で瀬戸大橋線に乗った。電車はゆっくりと、下津井瀬戸大橋を渡り始める。二階建ての下を走っているので、アーケードの中を進んでいく感じである。車窓から下を覗くと、確かに下は海である。潮の流れも見える。ただ、横を見ているだけでは、大河を渡る橋といった感覚である。速度を上げた列車は、たちまち島々を通過してしまう。時間にして五分そこそこだろうか。

崇徳上皇の霊廟

坂出からバスに乗って、高屋（たかや）神社に向かった。保元（ほうげん）の乱で讃岐（さぬき）に流された崇徳上皇（すとくじょうこう）ゆかりの地を訪ねるためである。この神社は崇徳上皇をお祀りしている。境内（けいだい）には「御棺台石」がある。崩御（ほうぎょ）した上皇の棺（ひつぎ）を六角の石に置くと、血がしたたったと言われる。

傍らには身をかがめたような、奇妙な曲がり方をした巨木が立ち、木洩（こも）れ日すらない薄暗さである。中央の棺が置かれた石は苔むしている。蟬（せみ）の声が響き渡り、快（こころよ）い風が吹き渡ってくる。彼方には瀬戸大橋のアーチも見える。

高屋神社から急坂を上っていくと、遠くに瀬戸の島々が見え

てくる。上皇が眺められた風景なのだろうか。彼方には本州がある。京の都はそのはるか先。許されて帰京することがかなわず、せめて写経だけでも届けようとしたが、呪詛（じゅそ）の恐れありと讒言（ざんげん）されて、ついに上皇は魔王となる決意をされたという。

> この里ちかき白峰（しらみね）といふ所にこそ、新院の陵（みささぎ）ありと聞て、拝みたてまつらばやと、十月はじめつかたかの山に登る。松柏は奥ふかく茂りあひて、青雲の軽靡（たなび）く日すら小雨そぼふるがごとし。

上田秋成の『雨月物語』の冒頭「白峰」は、五色台と言われる台地の西に位置する。諸国を行脚（あんぎゃ）していた西行（さいぎょう）は、白峰と

いう所に、崇徳上皇の陵墓があると聞いて、参拝したいと十月初めに登った。松や柏が深く茂り合って、青空に雲のたなびく日すら、小雨がしとしとと降るように薄暗かった。

白峯寺の中を歩いていく。護摩堂で不動尊を拝んだ後、左手に進むと道は三つに分かれる。正面は頓証寺殿である。崇徳上皇がたちどころに悟るように、鎌倉初期、鼓岡の御所を移したと伝えられる。前面の門は江戸初期に再建されたものだが、後小松天皇御宸筆の額が掛けられているので、勅額門と呼ばれている。門には源為義・為朝父子の像が安置されている。保元の乱で崇徳上皇に与して、為義は死罪、為朝は配流先の伊豆大島で自害している。

崇徳上皇は一一六四年（長寛二）八月二十六日（新暦では九月二十一日）に崩御された。御遺言により、稚児が嶽で荼毘に付された。『雨月物語』の「白峰」に描かれた西行が、崇徳上皇の霊廟の前で読経したのは、一一六六年（仁安元）であるから、崩御から二年後のことである。

白峯寺の勅額門を過ぎて、右の石段を上れば本堂、大師堂がある。頓証寺殿の左方、細い山道を下るのが、白峰御陵への道である。直径一メートル近くもある巨木の杉が数本、行く手を遮るように立ち並んでいる。しばらく行くと、左方に急な石段が続いており、右方が石の柵に守られた御陵である。

西行が上皇の菩提を弔うために、夜通し読経したのは、先ほど通った霊廟、頓証寺殿の前とされる。熱意に心動かされた

のか、霊廟が震動すると、崇徳上皇の霊が姿を現して和歌を詠(よ)まれた。

松山の浪(なみ)に流れてこし船の
　やがて空(むな)しくなりにけるかな

西行は涙して、御返歌申し上げた。

よしや君　昔の玉の床(ゆか)とても
　かからんのちは何にかはせん

松山の浪に流れ着いた船は、すぐに跡形もなくなってしまったと、上皇は配流の日々の空しさを詠まれた。それに対して西行は、たとえ昔は金殿玉楼(きんでんぎょくろう)におられたとしても、世を去ったのちは、それが何になりましょうか、成仏(じょうぶつ)なさいませと申し上げた。生前の怒りにかられた上皇は声を荒げて、魔王となる決意をした経緯を語られたという。

屋島は島にあらず

その日は屋島（やしま）のユースホステルに泊まった。同室になったのは専門学校でコンピューターを教えている二十代の先生。仕事が忙しくて、毎晩午後十一時頃まで学校にいるそうだ。「普通の会社員と同じですよ」と話していた。

もう一人は大学院農学研究科修士課程を出た人。各地の教員試験を受けつつ、旅行をしているそうだ。九州から来た大学四年生は、就職試験を受けながらの旅だった。

当の僕は日本語学校の専任教師だったが、経営が傾いて廃校寸前だった。若者がそれぞれ悩みを抱えながら、旅先で出会う人と語らうのを楽しむ、それがかつては全国に網の目のように

あったユースホステルの姿だった。

やや雲が多くて風もあるので、暑さが和らいだ気がする。語り合った三人と別れたので、ちょっと寂しい。記念撮影でもしようと思ったが、もう会うこともないだろうから、その必要もないわけだ。

ケーブルカーで上に登り、屋島寺（やしまじ）に参拝した。鑑真和上（がんじんわじょう）が開創し、弘法大師空海（こうぼうたいしくうかい）が南嶺（なんれい）に移したという。四国八十八箇所霊場第八十四番札所（ふだしょ）の真言宗（しんごんしゅう）寺院である。朱に塗られた山門が印象的である。

屋島をぐるっと徒歩で回ることにした。杉林の間に、多くの広葉樹が茂っている。屋島北嶺（ほくれい）の遊鶴亭（ゆうかくてい）展望台に出た。左端に

突き出したのが、白峰を含む五色台。すぐ右にあるのが鬼ヶ島。数多の島々の中で、ごろんと寝そべっているのが小豆島。

屋島の先端は長崎ノ鼻という。海に向かって天狗の鼻みたいな岩場が延びている。ウグイスとトンビの鳴き声。白い航跡を残して行く客船のエンジン音。自分の周りには人っ子一人いない。源平の古戦場となった屋島だが、塩田開発と干拓が進んで、四国と陸続きになっている。

ケーブルカーを降りて、ユースホステル前のうどん屋「わら家」に入った。繁盛しており、店の中はお客でいっぱいだった。農学研究科の彼が勧めていた店だ。古代の赤米で作ったおにぎりと、ざるうどんを注文した。確かにこしが強い。

志度に出て、平賀源内先生遺品館を見学した。エレキテルで

有名な平賀源内は、讃岐国志度の出身で、幕末に建て替えられた生家が残っている。屋敷の奥には薬草園がある。長崎に出て西洋の知識を、江戸では本草学を学んだ源内は、江戸中期の天才発明家として知られるが、晩年は誤って人を殺して獄死した。

なお、遺品館は移転して、平賀源内記念館として、二〇〇九年（平成二一）に新装開館している。源内の生涯がたどれるように、コーナー別に展示品が陳列されている。

屋島駅に戻って、ユースホステル前にある四国民家博物館「四国村」に入った。四国の民家や伝統的な生活を再現したもので、沖縄本島中部にある「琉球村」と同じ趣向である。

入口に近いところに、かずら橋があった。これは阿波の祖谷渓にあるものを再現したもの。蔓草のかずらを編んで渡した吊

り橋。歩くと左右に大きく揺れ、足もとの丸太も頼りないので、おっかなびっくり渡った。

　砂糖しめ小屋は円形の白壁に藁葺(わらぶ)き屋根といった外観で、中で牛が引いてサトウキビの汁を搾(しぼ)り取る。砂糖は奄美(あまみ)や沖縄以外では、四国でも作られてきた。和三盆糖(わさんぼんとう)は高級和菓子に使われる、淡い黄色の砂糖である。

　添水唐臼(そうずからうす)というのは、丸太をくり抜いた所に、竹筒で引いた水を流し、下につけた杵(きね)によって、鹿威(ししおど)しの原理で粉を挽(ひ)くというもの。水車のような大がかりな装置は必要なく、少量の水さえあれば、時間はかかるものの、きれいな粉が挽(ひ)けるそうだ。

鳴門の渦潮に近づくと

　屋島のユースホステルを出て、高徳線(こうとくせん)に乗った。池谷(いけのたに)で鳴門線(なるとせん)に乗り換える。今日は朝から曇で、時折小雨が降る生憎(あいにく)の空模様。台風はまだ四国と九州の間の海域にいる。

　鳴門駅からバスで鳴門公園に向かった。そこは四国と橋で結ばれた大毛島(おおげじま)にある。バスを降りたところで、店のおばさんに呼び止められた。船の時間を教えてもらい、大きな荷物も預かってくれるとのこと。随分親切な人だなと思ったが、渦潮を見る観潮船の切符を売っているのだ。

　海峡に渦が巻くのにはまだ時間がある。大鳴門橋架橋記念館に入った。ここでは渦潮の仕組みをさまざまな装置で説明して

くれる。人工的に渦潮を発生させる機械は凄みがあった。ただ、これは巨大な洗濯機のようなもので、下方からプロペラを回転させて、大きな渦を発生させているのだ。

日本一の長さだったエスカレーターで、展望台の上に立った。お昼になり、ようやく小さい渦潮が現れ始めた。昼食をとりたいので、すぐ下のフランス料理のレストランに入った。ここからもよく渦が見える。

手前に大鳴門橋（おおなるときょう）の白い雄姿（ゆうし）。鉄道も通せるように、二階建ての構造になっている。ただ、空が曇っているせいで、海面が緑色でいま一つ冴（さ）えない。景色の良いところで贅沢（ぜいたく）するのは、久し振りの気がする。

二十九歳のとき、某文学賞を受賞して、彦根（ひこね）のホテルの昼食会に出た時以来だった。ガラスの向こうには琵琶湖が広がり、ヨットが湖面を滑る姿が目の前に見えたものだ。

逆立つ波を眺めながら、僕はポーの「メエルシュトレエムに呑まれて」を思い起こした。主人公は岬の上から遠くかすんだ渦潮を眺めていた。かつて呑み込まれて九死に一生を得た渦潮を。

今の自分も一幅（いっぷく）の絵のような海峡を前にして、デザートのムースを食べている。あと一時間もすれば、観潮船に乗って渦潮に身を任せることになるのに。嵐の前の静けさといったところか。店内の音楽はボリュームを落としている。夜はグランドピアノの生演奏が聴けるらしい。店内には今、自分を除いて一組

しかお客がいない。潮は今盛んに、瀬戸内海から太平洋に向かって流れている。

　午後一時少し前に、荷物を預けたおばさんの店に行った。マイクロバスに乗って、観潮船の桟橋（さんばし）に向かった。漁船ぐらいの大きさの船に乗った客は、顎髭（あごひげ）を生やした少林寺拳法の青年と僕の二人だけ。船長のおじいさんの話では、小さい船の方が渦のすぐそばまで行けるそうだ。

「一度うちのに乗ったお客さんは、あっちの大きい船には乗れんから」

　モーターをフル回転させて、大鳴門橋の橋脚に向かう。手前まで来たところで、船室を出て甲板の柱につかまって、おじい

さんの指さす先の渦を探した。青年はしきりに質問している。僕はカメラのシャッターを切った。

　渦が巻き始めたとき、いきなり二メートルほど、海の底から沸き立つように、水の柱がせり上がった。瀬戸内側の浅瀬からは、早瀬のように海水がたぎり落ちてくる。大きく左右に揺れて、危うく倒れそうになった。

　ちょうどそのとき、太平洋側から貨物船が近づき、渦巻く海峡の手前で立ち往生していた。潮の流れをあの船はじっと読んでいるんだろう。

　潮は右回りに渦巻くと、糸巻きの糸のように解けていく。生じてはまた消える。大潮の時のような直径二十メートルにも及ぶ渦も、こうした小さな力が集まって生まれる。

　向こうに大型の観潮船が見えるが、立ち往生した船のように動かない。

「あそこじゃ、白い波しか見えんよ」とおじいさんは言う。渦潮は海釜（かいふ）と呼ばれる瀬戸内側の淵から、狭く浅い海峡に一気に這い上がってくる潮のために生じる。すでに午後一時を回っている。大きな渦が生まれようとしている。

　人々はなぜ渦潮に惹（ひ）かれるのか。これほどの奇観を目にすることができるのは、鳴門をおいてないからだが。沖は凪いでいても、ここだけは時化（しけ）のように、船を揺さぶる力を全身に受けて、吸い込まれるように渦を眺めている。

　怖い物見たさということもある。あの渦のような巨大な力に翻弄されたいからか。逆巻く力は海の底深くまで続いている。

めくるめく眩暈（げんうん）のうちに、自己の奥に潜む宇宙を感じたいのだ。ブラックホールに吸い込まれる畏怖（いふ）に似ている。事象の地平線を越えたら、二度と光を見ることがないのに。

　船はまさに巨大な渦の盛り上がった縁にあった。奈落（ならく）の底を一瞬覗いた気がした。次の瞬間、船は猛スピードで渦を離れた。ぎりぎりの境界まで迫ったところで、大鳴門橋の下をくぐり、数分で元の桟橋に戻っていった。

　船に乗っていたのは、十五分ほどだった。あまりに衝撃的な体験だったので、実際にはもっと長い時間が経っていたような。行きと同じように、マイクロバスに乗り、荷物を預けたおばさんの店に戻った。

少林寺拳法の青年は高松に出ると話していた。とりあえず、彼と一緒に徳島駅行きのバスに乗った。彼は小鳴門橋（こなるとばし）のバス停で乗り換えた。短い間だったが、一人旅では名も知らぬ人との出会いと別れが、いつまでも心に残るのだ。

風は次第に強まってきた。やがて叩きつけるような雨が降り出した。吉野川の橋を渡るとき、川幅の広さに驚きながらも、豪雨で煙ってよく見えなかった。徳島駅に着くと、あわてて駅ビルに飛び込んだ。一部の列車に遅れが出ていた。

室戸岬の霊場

その夜は小松島（こまつしま）のユースホステルに泊まった。老夫婦が経営している合宿所風の建物で、「修メテ二天爵ヲ一而人爵従フレ之ニ」（最高の品位を修めれば、地位や財産は自ずともたらされる）とか「慈悲寛大自己反省（じひかんだいじこはんせい）」（慈しみのある広い心を持って、何かあっても他を責めずに反省する）など、格言が書かれた額（がく）が掲げてあった。

豪雨は朝になってもやまなかった。土砂降りが時折小降りとなるので、その間に名古屋から来た青年とユースホステルを出た。小松島駅から牟岐線（むぎせん）に乗り、甲浦（かんのうら）に向かった。

運良く先頭の座席が空いていたので、彼と一緒に並んで腰か

けた。鉄道マニアにとっては特等席である。行く手に延びるレールや、待ち構えるトンネルが、こちらに迫ってくるからだ。実は彼は今で言う「撮り鉄」で、鉄道撮影が趣味だった。
鉄道について聞くと、話が弾んできた。海部（かいふ）〜甲浦間はＪＲではなく、阿佐（あさ）海岸鉄道の阿佐東線という新線だそうだ。当初は高知県の後免（ごめん）まで線路がつながるはずだったが、典型的な赤字路線で、甲浦から先は未成線として放置されている。将来的には線路と道路を直結するデュアル・モード・ビークルが導入されるらしいが。
甲浦駅は高架の上にあり、駅舎は一階だった。改札を出た後、お腹が空いたので、バームクーヘンを買うと、売店のおばさんがお茶を出してくれた。彼とは将来の希望など話していたが、

十二時十五分頃の列車で、元来た線路を戻っていった。
十二時四十分過ぎ、安芸（あき）行きのバスに乗った。それから約一時間、バスに揺られた。室戸岬（むろとみさき）に着くと、雨こそ降っていなかったが、やはり風が強かった。お腹が物足りないので、食堂で鰹のタタキを食べ、海岸をぶらつくことにした。
若き日の空海は、真言を百万遍唱えれば、一切の経典の意味を暗記できるという虚空蔵菩薩求聞持法（こくぞうぼさつぐもんじほう）を、一人の沙門（しゃもん）から授かった。阿波国の大瀧嶽（たいりょうのたけ）によじ登り、土佐国の室戸岬で修行に勤（いそ）しんだ。「谷響（たにひびき）を惜しまず、明星来影（らいえい）す」と『三教指帰（さんごうしいき）』にある。
修行の効験（こうけん）により、虚空蔵菩薩の化身である金星が現れた。

佐藤純彌監督の『空海』では、北大路欣也が演じる空海の体に、金星が飛び込むさまが映像化された。仏教的には虚空蔵菩薩との一体化を果たし、即身成仏したということなのだろう。ヨーガのクンダリーニが覚醒したのだとも言われる。

海岸に二つの洞窟がある。左は空海が住まわれた御厨人窟、右が修行された神明窟である。御厨人窟の方が深く、神明窟の方は入口に鳥居があって、地下水のしたたりがすごい。中は空気がこもった匂いがする。いずれも苔がわずかに生える岩山の断崖下にあり、視線の先には太平洋の水平線が、ゆるやかな弧を描いている。

最御崎寺は四国八十八箇所霊場の第二十四番札所で、室戸岬

先端の高台にある。本尊は虚空蔵菩薩である。当時は宿坊だけではなくユースホステルもあった。泊まっているのは、自分を含めて男性三名だけだった。

千葉から来た青年は、前年に高校を卒業したらしい。とても感じのいい子で、北海道の礼文島へ行ったことが、よい思い出になっているようだった。僕自身も二十代の頃、愛とロマンの八時間コースという、礼文島西海岸の悪路をハイキングしたことがある。実は汗と涙の八時間であり、遭難者も出たことで、今では海沿いのコースは一部閉鎖されている。

なぜ室戸岬に来たのかというと、ホエール・ウォッチングができると聞いたからだった。しかし、台風が通過したばかりで、海が荒れていることから、明日も船を出すことができないとい

うことだった。イルカならその後、小笠原で一緒に泳いだりしたが、鯨を間近に船上から見る体験はいまだにしていない。

最御崎寺のユースホステルを、チェックアウトした。高知に出ることにした。室戸岬灯台の前に出ると、同宿した千葉の青年と出会った。灯台を背景にお互いの写真を撮った。別れを告げて、きつい石段を下りていくと、また、彼の姿を見かけた。

会いたいと思っていたからかな、などと考えていると、バス停の前に彼が立っていた。「郵便局まで行きたいんで、途中までご一緒します」と彼は言った。旅行貯金というのをやっているそうだ。旅先で郵便貯金をすることで、旅行の記念とするものらしい。

彼がバスに乗っていたのは、ごくわずかの間だったけれども、あの笑顔を見ていると、鯨が見られなかった憂さも、それほど気にならなかった。旅の喜びの一つは、そうした人との出会いである。

追憶の高知

高知行きのバスに乗っていた。車窓から見えるのは太平洋。手前数百メートルまでは、ミルクを溶かしたようなエメラルドグリーン。沖は青く境界線がくっきり見える。珊瑚も生息するというから、沖縄の海に似ている。ただ、沖縄は光がさらに強く、浜も美しい白砂だ。沖合に白波が立つたびに、鯨だろうかと、半ば冗談気分で目をやったりした。

安芸付近まで来ると、廃止された土佐電気鉄道安芸線のトンネルや橋が、無慚な姿をさらしていた。しかし、ほぼ同じ経路を阿佐線（ごめん・なはり線は愛称）が走ることになるのは、この時点から八年後の二〇〇二年（平成一四）のことである。

建設するならどうして廃止したんだろう。

高知を訪れるのはこれが二回目である。最初は高校の修学旅行のときで、それから十五年も経っていた。はりまや橋のあたりを、制服姿で同級生と歩いたものだった。「土佐の高知のはりまや橋で、坊さんかんざし買うを見た」という「よさこい節」のはりまや橋だが、当時は朱塗りの欄干のみ残して埋め立てられていた。一九九八年（平成一〇）以降は石造りの欄干に変わり、はりまや橋公園に朱塗りの橋と水路が再現されている。

高知城は天守閣と本丸御殿、追手門がそろって現存する唯一の城だという。廃藩置県による廃城の嵐を生き延びて、江戸時代の城郭の全体像を伝える唯一の城だ。藩主や家臣が出入り

したさまを、実物の建造物で想像できる城なのである。
　高校生の時は天守閣の前まで行き、「アイスクリン」と書かれたアイスクリームを、食べ損なったことだけは覚えている。今回は実際に本丸御殿を見て、天守閣まで上ることができた。高台にこれほどの高さでそびえる物は、当時はほかに存在しなかった。この高みから市中を眺めること自体、城主の権威を象徴していたのだろう。
　天守閣という名の由来は、キリスト教の神、天守を祀ったからだとも、仏教の守護神、毘沙門天（びしゃもんてん）を祀ったからだとも言われている。いずれにしても戦国時代に生まれた建築様式で、天から政（まつりごと）を任された領主が、天になりかわって治めるための建物だった。

　天守閣から下りて、鳩に豆をやっていたら、前日の雨でお腹をすかせた鳩、約百五十羽が、一斉にこちらに向かって下りてきた。豆を空に放り投げると、それに合わせて鳩も飛ぶ。肩や腕に留まって豆をねだる奴もいる。こうなると、まるでヒッチコックの「鳥」の世界だ。

　桂浜に向かった。前回の修学旅行では、見ることができなかった。「また来られるからさ。その時に見ればいいさ」と同級生が言っていた。実は夜になって闘犬を見に行ったのだが、桂浜は真っ暗だったのである。
　まず、闘犬を見ることにした。土佐犬は在来種とブルドッグを掛け合わせた犬で、噛みつかれても皮が伸びるため、闘いで

のダメージを受けにくいとされる。
高校生の時に見たように、今回も最初に横綱の犬が出てきて、すぐに引っ込んでしまい、実際に試合をしたのは、やや小振りの二匹だった。犬は目の色を変え、歯を剝（む）き出し、相手の耳にかぶりつきながら、前足でお腹を押さえ込もうとする。二転三転し、低いうなり声を発したかと思うと、下になった奴が上にいた奴を押し倒してしまう。
何でこんな喧嘩をさせられているのか。犬はうすうす気づいていても、こみ上げる怒りに我を忘れてしまったようだ。勝負は五分間ほどでついた。
桂浜を見下ろす高台の上に、遠い沖を眺める坂本龍馬の銅像がある。ちょうど背中の方から光が当たっているので、龍馬の

顔をしっかり見つめることができない。幕末の時代劇は龍馬抜きにして語れないほど、人気者となっているのだ。
それは司馬遼太郎（しばりょうたろう）の小説の影響である。明治維新のために尽力し、時代が急変する前に暗殺された悲劇の志士という印象が強い。ただ、近年は歴史の教科書から姿を消すのでは、と言われている。大政奉還（たいせいほうかん）にしても、後藤象二郎（ごとうしょうじろう）が前藩主の山内（やまうち）容堂（ようどう）に進言し、実現したものである。
実際は武器商人グラバーに利用され、伏見奉行所（ふしみぶぎょうしょ）の役人を射殺してお尋ね者となり、最後は幕臣の京都見廻組（みまわりぐみ）に斬殺（ざんさつ）された。明治維新が結果的には、薩長を利用したイギリスによる日本の属国化であっても、悲痛な思いで日本を守ろうとした土佐の武士の魂は、貶（おとし）めることができないだろう。

桂浜に下りていった。右端に松の生えた岩山がある。海に突き出した頂(いただき)の上には、赤い鳥居と小さな社(やしろ)が建ち、そこに至る石段と可愛い石橋が続いている。

月夜が美しいという。満月の夜なら石段や社が、闇から浮き上がって見えるのだろう。今は青い海に光がまたたいている。浜には小指の先ほどの小石が打ち上げられている。波は岸辺近くで一気に崩れる。

岩山の社に向かって駆けていった。そこから夕日を浴びて輝く海原を見下ろした。もう時間がない。バスに飛び乗り、桟橋の所で路面電車に乗り換える。過去の遺物と思われる乗り物だが、車内から見える家並みや、レールの可愛らしい響きを聞くと、懐かしさがこみ上げてきた。

高知駅前のユースホステルは、夕食の六時半ぎりぎりに着いた。聞いていた通り、鰹のタタキが出た。大皿に盛った皿鉢(さはち)料理である。食事の後、ミーティングに出て見ることにした。高知の観光案内ビデオを見た後、「土佐の箸拳(はしけん)」というのを教えてもらった。

箸三本を渡された後、ジャンケンで先攻を決める。箸を〇本から三本、右腕の陰に隠す。先攻の人が「いらっしゃい」と言う。後攻の人は、合計が三本になることを予想して「三本」と言う。先攻の人は「一本」または「五本」と言う。箸の本数を当てた方が勝ち。偶数本だったら引き分け。先攻後攻を交代し、どちらかが勝つまで行う。

これで負けると、盃（さかずき）の酒を飲まなければならない。ところが、土佐の盃は底に穴が開いており、指で穴を押さえ続けなければならない。こぼさように飲み干させるためである。

翌朝は晴れていた。ユースホステルを出て、高知駅に入った。ここには思い出がある。高校の修学旅行で、グループ行動をする日、一人が先に走っていった。トイレに入るとか言っていた。駅に到着して、発車のベルが鳴っているのに、彼の姿は現れなかった。

「まさか、乗ってるよな」

ドアが閉まって、土讃本線の上り急行は発車した。ところが、彼は改札口で走りゆく僕らの列車を、唖然（あぜん）とした表情で眺めて

いた。

「信じられない」

彼を見捨てるわけにもいかないので、後免で下車して高知に引き返した。彼が悪びれず「予定通り行けるの？」と言ったので、「行けるはずねえだろ」と、みんな怒り出してしまった。

午前中に大歩危峡へ行き、午後は高知城と桂浜を見て回る予定だったのだが、大歩危峡（おおぼけきょう）で船に乗って、高知に戻ってからは、高知城の前まで行く時間しか残っていなかった。

とりあえず、鈍行（どんこう）で大歩危峡に行くことにした。列車を待っていると、韓国の朴正熙（パクチョンヒ）大統領が暗殺されたというニュースが流れた。一九七九年十月二十六日のことである。一九七四年にも暗殺未遂事件が起きて、夫人が射殺されていた。軍事独裁

政権の終焉（しゅうえん）だった。
ちなみに、僕は大歩危峡には、そのときしか行っていない。二度訪れたような錯覚をしていたが、グーグルのストリートビューで、船着き場の写真を見て、記憶がよみがえって感激したためだった。
高校の修学旅行では、桂浜で闘犬を見た後、フェリーに乗船した。高知港を出港する頃には、すっかり暗くなっていた。フラッシュをたいて撮った写真では、同級生の姿が闇から浮き上がっていた。
出航後は四国の沖を航行していった。沿岸の明かりを甲板に立って眺めていた。船はかなりの速度で進んでいた。夜風が顔に当たるのは快かったが、船縁から下を覗くと、真っ黒な波が

白い歯をむき出して、人が落ちてくるのを待っていた。
ぞくっとして、僕は船室の方に戻った。立っていると酔うと言われて、船の進行方向に合わせて体を横たえた。頭がゆっくり下がり、ゆっくり上がっていく。船と一体になる感じだった。同級生が旅行の話をしていた。翌朝、大阪港に着けば、そのまま新幹線に乗り込むことになる。旅の感覚にひたれるのは、その夜が最後だった。床から伝わってくる揺れを感じながら、いつまでも夜が明けなければいいと思ったものだ。

四万十川の清流は

さて、今回の旅も三分の二が終わった。高知駅を発った僕は、土讃線の下り特急に乗った。窪川（くぼかわ）からは土佐くろしお鉄道の中村線に入り、予土線（よどせん）と平行して進む。若井駅（わかいえき）を過ぎて川奥信号場（かわおくしんごうじょう）で予土線と別れて、大きくループするのだが、トンネルばかりでよく分からない。

中村駅に着いた。現在はそこから宿毛線（すくもせん）が延びているが、当時は建設中で終着駅となっていた。開業は一九九七年（平成九）十月だから、約三年後のことである。駅前で自転車を借りて、渡された地図を参照しながら、サイクリングを始めた。

臨済宗（りんざいしゅう）の太平寺（たいへいじ）、不破八幡宮（ふわはちまんぐう）に詣でてから、四万十川（しまんとがわ）をさ

かのぼっていく。遊覧船が見える所で一休み。川岸にはススキが生え、四万十川の流れもゆるやかと言いたいところだが、数日前の台風の余波で水量が多く、やや濁り気味で流れもかなり速い。

もっと上流に行って、四万十川らしい風景を眺めてやろうと思った。ところが、佐田沈下橋（さだちんかばし）に出る道が工事で通行止になっていた。やむなく、川登（かわのぼり）まで行ってしまった。

行けども行けども上り坂で、時間はどんどん厳しくなる。お腹は減ってくるし、道が正しいかどうかの確証もない。中村からはすでに十数キロさかのぼっていた。観光客の姿もない。岩山が崩され、砂利を運ぶトラックが次々に上ってくる。大自然に囲まれたなどとは、とても言えた代物ではない。

佐田沈下橋が見えてきたところで、ようやく精神的な余裕が出てきた。この橋は大水の時には濁流に沈んでしまう。コンクリートの一本道が川を横切るだけで、欄干などは全くないから、自然の脅威に逆らわないように出来ているのだ。

四万十川という名前だが、一九九四年（平成六）までは渡川（わたりがわ）というのが正式名称だった。だから、旅をした時点ではあくまでも通称だった。ただ、江戸時代から「四万十川」と書いて「わたりがわ」と呼ばれていたので、呼称としてはかなり古いものらしい。

語源については諸説があってはっきりしない。そのうちの一つがアイヌ語の「シ・マムト」（非常に美しい）である。富士

山の「フジ」もアイヌ語の「火の神」を語源とするように、先住民族の縄文人はアイヌ語を話していたのだろう。

アイヌ語の「シ・マムト」が、清流四万十川の語源としてふさわしい気がする。あくまでも印象としてであるが。上流にダムが築かれていない、数少ない自然のままの川である。

ただ、最後の清流と言われる四万十川なのに、その日は台風の影響が残っており、沈下橋の下を流れるのは濁流だった。中州が少ないと思ったのだが、川岸の草の多くがなぎ倒され、根元が水没した木々の姿が目についた。

サイクリングを始めた地点に戻ってきた。遊覧船の見える堤の上に立っている。やっと戻れたんだという安堵感（あんどかん）に満たされた。本当は土手に座って、今の思いを日記にしたためたいとこ

ろだが。
　四万十川橋、通称赤鉄橋の下流に、造りかけの橋と橋脚が見える。宿毛まで延長されるくろしお鉄道の鉄橋だろう。当時はまだ中村駅が終点だったから、これから宿毛の先までバスで移動することになる。駅前の食堂で冷やし素麺を食べた。暑い中を走った後なので、喉が冷たくて気持ちよかった。
　足摺岬はここから真南の方向にある。自殺の名所で、田宮虎彦が『足摺岬』という短編を書いた。自殺するために岬に向かった大学生が、遍路の老人や商人に助けられて、死を思いとどまるという話。作者自身は晩年脳梗塞を患い、投身自殺してしまったが。
　成人したばかりの頃は、精神的に不安定で、僕も自殺を考え

たことがある。その日の朝、長い夢を見ていた。自殺しようとしていた青年を、僕は必死に思いとどまらせようとしていた。心の中にいるもう一人の自分に救われたのだった。

ひっそりとした柏島

宿毛方面に向かうバスに乗っていた。車窓からは建設中のくろしお鉄道の高架橋が見える。宿毛では下りずに、二時間ほどは揺られていた。バスは足摺半島の向かい側に進んでいた。二ツ石を過ぎる辺りから、道幅は一方通行のように狭まり、くねくねと曲がっているので、目が回りそうになった。野猿公園を過ぎると、実際に野猿が三、四匹路上に出ていた。猿は餌をくれる人間を弱者と見なし、歯をむき出して威嚇する習性がある。貢ぎ物でも持ってきたと思うのだろう。

柏島の手前、新大橋でバスを降り、古い方の橋を渡っていった。随分ひなびた所に来てしまった気がした。海水浴やダイ

ビングの若者が集うと、ユースホステルの案内には書いてあったが。

大堂サンセットというユースホステルに着いた。大堂とは岬一帯の地名で、日没が美しいのでつけられた名前なのだろう。若者との交流を楽しみにしていたが、民宿を兼ねたユースホステルには人影がない。

「今日泊まるのはあんただけだよ」

力が抜けてしまった。明日の夜も他の宿泊客はいないらしいので、連泊するのはやめて、朝食後に出発することにした。

「どこで泳ぐんですか」とペアレントのおじさんに聞いたら「あそこ、橋の下だよ。砂浜になってるところ」と指さした。

ちょっとがっかりしたが、明日発つとなると、泳いでいる時

間がない。そこで、もう午後五時を回っていたが、海水パンツをはき、その上に服を重ね着して、水中眼鏡とシュノーケルを持って、海峡の砂浜に下りていった。

　海水はあまり冷たくなかった。岸の近くで泳いでいると、アジが十匹近く一列に泳いでいた。他の魚の姿はなくて物寂しい。

　ところが、大きな岩がごろごろしている上に行くと、その隙間（すきま）に、いた、いた、青や黄色、赤紫のカラフルな熱帯魚、銀と黒の横縞が映えるイシダイの稚魚も。大きくなったら、もっと沖の岩場に棲むのだろうが。

　波がほとんどないので、落ち着いて魚と戯れることができた。泳がずに水面で浮いていた方が、魚たちは恐れずに、すぐ近くまで泳いできてくれる。

　初めに見たアジが続けざまに数匹、水面から躍り上がった。一メートル近くは跳ね上がったが、単にダンスがしたかったわけでもあるまい。他の魚に食べられそうになったのか。

　振り向くと、ビニールの袋が浮いていた。中に入れたシャツやズボンもぐしょぐしょになり、靴も流れていきそうになった。知らないうちに、潮が満ちてきていたのだ。

　海から上がって、シャツとズボンを真水で洗った。ユースホステルに戻って干すと、シャワーを浴びて着替えた。もう午後七時だった。ユースホステルは食事なしなので、隣の食堂で夕食をとった。刺身と酢の物、味噌汁だったが、とてもおいしかった。くたくたになっていたから余計に。

　夕食後は、日の暮れかかった橋の方へ散歩に出た。明日の日程について考えよう。宇和島（うわじま）のユースホステルも、一人しか泊まっていなかったというし、足摺岬に回っている時間もない。交通の便が良くて、人と話せるところに泊まりたい。一人旅は孤独だから、宿に泊まっている間だけでも、誰かと一緒にいたいのだ。

　結局、松山のユースホステルに二泊することにした。部屋に戻ってからは、旅の日記をずっとつけていた。書いている間は、過去の瞬間にトリップしているから、結構気が紛れる。それにしても、高知駅前を出てから、四万十川沿いをサイクリング、そして、夕方はシュノーケル。随分活動したものだな。

　翌朝は雲が多いが、時折日が差していた。午前七時半、隣の

食堂で朝食を食べた。その後、海岸をぶらぶら散歩した。本当は今日一日、ここで過ごすはずだったのだが。つきあい始めた相手を、すげなく振ったような気分。

　柏島はかつては浅い海峡をはさんで、本土と向かい合っていたが、今では新旧二本の橋で結ばれ、地続きとなっている。島に渡ってすぐ左側が砂浜となっており、昨夜からキャンプしている家族連れの姿が認められた。

　入江の向かいは漁港である。時折、モーターボートが沖の方へ、白い航跡を残して過ぎていく。早すぎる別れの時が迫っている。荷物をまとめるために、ユースホステルに戻ることにした。

みんなそろって道後温泉

午前八時半過ぎ、柏島のユースホステルを出た。バスに乗って宿毛バスセンターへ。バスを乗り継いで宇和島駅に着いたのは、十二時半過ぎだった。

　昼食は弁当を買った。改札にかなりの人が並んでいたが、予讃線の始発駅だから座れるだろうと思った。先頭の車両に駆け込み、座席に荷物を置いた途端、すぐ前に座った人が振り向いた。

　余りに驚いて言葉が出なかった。屋島のユースホステルで出会った、専門学校でコンピューターを教えている先生だった。実は少し前、彼はどの辺を旅しているのかと考えていたのだ。

すぐに意気投合して、別れてからのこと、仕事のことなどしゃべりまくった。彼もこれから松山のユースホステルに向かうということだった。

「一緒の部屋にしてもらって飲みましょう」

　僕も同意見だった。松山に到着したのは二時十五分過ぎ。ユースホステルには向かわず、市内を見物することにした。

　松山城に行くことになった。お堀の辺りからお城まではロープウェイとリフトがある。小雨がぱらついてきたので、ロープウェイにした。所要時間は約二分。

　松山城は雷火で焼失したが、天守閣は一八二〇年（文政三）に再建された。城郭の復元が終わったのは一八五四年（安政元）

である。規模としては高知城の方が勝るが、かなり高い所にある平山城で、そこに至るまでにいくつもの門があり、警備体制や非常時への備えは、相当堅固だったと見られる。

城郭の全体が保存されている点、規模の大きさ、平地からの高さの点などから、城の軍事的な側面と、権威を象徴する威厳を兼ね備えていたことが分かる。一度は焼け落ちた全体を、よくここまで復元したものだと感心させられた。明治維新や戦災を乗り越えられたのも、奇蹟的としか言いようがない。

松山市駅まで来た。子規堂にも行ってみた。正宗寺という臨済宗の寺の境内にある。蔦のからまる藁葺き屋根の平屋で、正岡子規が少年時代に過ごした家を、復元したものだという。子規が使った机や遺品などが展示されている。

正岡子規というと、写生文を勧めたり、月並み俳句を批判したり、『万葉集』の飾らない精神に引かれたということぐらいしか、すぐには頭に浮かんでこない。

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

この句は有名だから、大抵の人は知ってるだろう。松山中学を中退して上京、夏目漱石と知り合う。日清戦争に従軍し、帰国の船上で喀血した。子規という号はホトトギスを意味する。ホトトギスの口の中が真っ赤で、まるで血を吐いているように見えるところから、肺病に苦しむ自身の号にしたという。

高浜虚子や伊藤左千夫、長塚節などの門人を育てたから、

中年ぐらいまで生きたと思われがちだが、享年は三十四歳である。亡くなったのは東京の根岸である。鶯谷駅に近い子規庵という建物は、関東大震災で焼失した子規の旧宅を再建したものだという。

　松山ユースホステルに着いたのは、午後六時半だった。夕食を頼んでおいたのだが、とても豪華で驚いた。トンカツに、イカと野菜の酒蒸し、グラタンに和え物、サラダ、スープに西瓜までついていた。赤ワインも一杯百円で飲めた。

　部屋の方も素晴らしかった。マンション風の入口で、エアコンはもちろん、天井にはシャンデリアと扇風機、洗面所にはテーブルと椅子、電話機。二段ベッドの梯子を上がると、屋根裏

部屋のようになっており、広いスペースにはテレビも置いてあった。

　専門学校の先生と、道後温泉に行くことにした。夏目漱石の『坊ちゃん』にも出てくる本館は、一八九四年（明治二七）に建てられた物。小説を思い出して、思わず泳ぎたくなった。大きな浴槽の中央には、金属で出来た円筒状の注ぎ口がある。そこからやや熱めの湯が出てくる。神経痛やリューマチに効くらしい。盥も椅子も、昔ながらの木製である。お湯から上がると、お茶と冷水を振る舞われた。

　ユースホステルへの帰り道、日本酒とビール、おつまみなどを買った。部屋に戻るとベッド上の屋根裏部屋で、専門学校の先生と宴会を始めた。

すると、同室らしい青年が「仲間に入れてください」と入ってきた。それは高知駅前のユースホステルで会った大阪の大学生だった。ところが、先生の方もその青年と顔見知りみたいだった。実は、僕が高知駅前に泊まる前日に、同室だったというではないか。

大学生が恋人を連れてきた。彼女を含めて四人で宴会をした。お酒が足りなくなり、ユースホステルの食堂で買ってきた。ここで自己紹介が始まり、専門学校の先生が僕のうちのそばに住んでることが分かったり、大学生のカップルが剣道をやってることなども。彼女の方は専門が日本語学科で、僕がやってる日本語教師の仕事について聞きたがった。

話が盛り上がってきて、十二時過ぎまで騒いでしまった。今

のユースホステルの多くは、お酒も飲めるようになっているが、部屋に異性を連れ込んだり、日付が変わるまで酒盛りするのはタブーである。

翌朝、専門学校の先生は金刀比羅宮に行くと言っていた。今治（いまばり）までは一緒の列車に乗った。ホームに降りて、僕は今治城に向かった。藤堂高虎（とうどうたかとら）が築城した城で、瀬戸内海に面した平城（ひらじろ）である。堀に引かれているのは海水で、船荷を陸揚げする港も整備されていた。

ただし、明治維新の時に解体されて、内堀と石垣の一部を残すのみとなった。一九八〇年（昭和五五）以降、天守閣や門の再建が進み、往時の面影を偲（しの）ぶことができるようになった。

とはいっても、中は鉄筋コンクリートの造りで、博物館となっている。武具や書簡などが展示されているが、高知城や松山城など、本物を見てきたばかりなので、失望する気持ちの方が強かった。

当時はまだ、本四連絡橋の尾道（おのみち）今治ルートは開通していなかった。竣工（しゅんこう）する五年前のことである。今治の前にある来島（くるしま）に行ってみることにした。

来島は村上水軍の本拠地で、「狂う潮」がなまって来島になったと言われるほど、海の難所として知られている。波止浜（はしはま）から来島まで五分、小島（おしま）まではさらに五分、今は尾道今治ルートのインターチェンジのある馬島（うましま）まではもう一〇分かかった。小型の連絡船に乗った五十分の船旅だった。島に渡るのが目

的ではなかった。来島海峡の中では、馬島の手前が一番潮の流れが速かった。船は大きく揺れ、はっきりした渦こそ見えなかったが、早瀬のような流れが、絶え間なく向きを変えていた。

松山に戻ってから、奥道後（おくどうご）に出かけた。湧ケ淵（わきがふち）は石手川（いしてがわ）の上流にある。そこには次のような伝説が残っている。江戸初期の元和（げんな）年間、この淵に棲む大蛇が、夜な夜な美女に変身し、通行人を淵に誘い込んで殺していた。そこで、現れた美女を身を隠して鉄砲で撃ったところ、轟音（ごうおん）とともに淵の水が渦巻き、のたうつ大蛇の姿が現れた。それからというもの、美女が人をたぶらかすことはなくなったという。

蛇を斬った岩と聞けば淵寒し

夏目漱石が詠んだ句である。奥道後はあたかも、京都の山奥のような風情（ふぜい）がある。朱塗りの橋を渡ると、「錦晴殿（きんせいでん）」という金閣（きんかく）を模した建物が、もみじの大枝から覗いている。ただし、二〇〇一年（平成一三）の土砂崩れで流出し、現在は山門を残すのみである。さらに進むと、小振りながら渓谷が現れ、凄まじい音を立てて大岩を削り、深い淵を作っている。これこそ、大蛇が棲んでいた湧ヶ淵である。

少し下流にあるのが不動滝である。「福寿山洞」という洞門は、歩道の脇を勢いよく清水が流れ、一気に滝壺に落ちていく。荒削りの洞の中には、不動明王（ふどうみょうおう）と地蔵菩薩（じぞうぼさつ）が祀られている。

流れ落ちる水音は、鈍くこもったような音を響かせる。

奥道後ロープウェイで山頂まで登ってみたが、ビヤガーデンが低俗な音楽を流しているので、鳥の声もよく聞こえない。瀬戸内海はかすんで、街並みとともに黄色い光に溶けている。ジンギスカン料理でも食べない限り、ロープウェイで上に登る必要はない。

当時感じたことを綴ってみたか、現在では「福寿山洞」という洞門も閉鎖され、奥道後ロープウェイも廃止されてしまった。金閣寺を模した「錦晴殿」も崩れ去ったわけだから、京都の山奥のような風情も失せて、すっかりさびれた感じになっている。

松山ユースホステルに戻ってきた。午後六時半を回っていた。

夕食を終えた後、僕と専門学校の先生、大阪の大学生、その彼女の四人で、道後温泉に繰り出した。

神の湯の二階席を選んだのだが、浴槽は昨日と同じ階下にあった。ゆっくり湯に浸（つ）かった後、二階席に四人は集まった。浴衣（ゆかた）に着替えると、お茶と煎餅を振る舞われた。

その夜は神社のお祭りだった。窓からはお囃子（はやし）が聞こえてきた。温泉の目と鼻の先には仮設の舞台がしつらえられ、カラオケ大会が行われていた。最後に女性の演歌歌手が歌い出すと、みんな息を呑んで聴き惚れていた。温泉の従業員に、四人並んだところを写真に撮ってもらった。

旅行最後の夜だった。息を呑むような絶景は少なく、途中天候に恵まれなかったり、一人きりの夜を過ごしたりしたが、最

後には人との出会いに恵まれた。昨夜のように部屋に戻ると、性懲（しょうこ）りもなく酒盛りを始めた。大学生三人組が遊びに来ていた。十二時半になってようやく消灯した。

朝七時に起床して朝食。皆で記念写真を撮った後、松山ユースホステルを出た。専門学校の先生と、一緒の列車で帰ることにした。

松山発岡山行きの特急に乗った。所要時間は三時間弱。そこまでは隣の席に座れたのだが、先生は岡山発のひかり号の指定席を予約していた。入線してきた列車は満席のようだったが、先生が席を見つけたくれたので、新幹線内も座っていくことができた。

新幹線を降りて別れる前に、旅の感想を聞いてみることにした。

「今回の旅行は、旅そのものや、見た所が良かったというより、出会った人たちが良かったっていうのかな。思い出がたくさん残った。やっぱり、旅はいいな」

その後、一度だけ彼と電話で話したが、それ以降会っていない。旅の思い出をそのまま大切にするためにも、一期一会だと考えて、心の中で思っているだけの方がいい。

三十年ぶりの松山

日本航空の格安チケットが手に入ったと、友人が電話してきた。ただし、北海道や沖縄など、人気の観光地は売り切れで、予約できたのは松山だというのだ。

「しまなみ海道、サイクリングしたいし」

実は、五年前に友人と広島に行ったとき、尾道から因島まで、電動アシスト自転車を借りて、海沿いを走ったことがある。

「次は、今治から走りたいね」と、彼が言っていたのを思い出した。

今回松山に向かうことになったのは、今述べたような事情による。最後に訪れたのは三十歳の頃だから、四半世紀以上の歳

月が過ぎたことになる。

　五月の末のよく晴れた日、松山行きの日航機は十二時半過ぎに、羽田空港を離陸した。上空はやや雲が多かったが、富士山の真上を飛行したので、山頂に雪をいただいた姿を見下ろすことができた。火口のくぼみまでくっきり見えた。

　飛行機は本州を横断する形で、陸地の上を飛んでいった。神戸の上空を過ぎ、明石(あかし)大橋を遠方に見た。ぐんぐん高度を落として、松山空港には、予定の一時五十五分より遅れ、二時ちょっと過ぎに到着した。

　路線バスでJR松山駅に出た。リムジンバスの半額で来られた。とりあえず、昼ご飯を食べたかったのだが、早く行かないと松

山城を見る時間がなくなると、友人に言われた。

　伊予鉄道の路面電車で大街道(おおかいどう)に向かった。乗ってすぐに、伊予鉄道の高浜線と平面交差する地点を過ぎた。鉄道のレールが平面で交差するのは、極めて珍しいことだ。車輪がレールを横断するときに、ガタガタガタガタという震えが伝わってきた。

　大街道停車場で降りた。そこでカレーラーメンを食べた。蛇口から出るオレンジジュースもあったが、飲む時間がなかった。小学生の頃、藁半紙(わらばんし)にクレヨンと鉛筆で、物語を書いて遊んでいた。その中に蛇口からジュースが出てくる場面があった。好きなときに飲めるというのが、その頃の願望だったわけで、蛇口から出るジュースには思い入れがあったのだ。

　松山城に上るロープウェイの駅に向かったが、すぐに乗れる

リフトの方を選んだ。以前来た時は雨が降っていたが、晴天だったらリフトの方が断然いい。一人乗りで少し揺れたが、風を浴びて気持ちよかった。

リフトを降りてから十分ほど上ると、天守閣がある高台に出る。かなりの広さがあった。この城は山の上にあるのに、そこから天守閣を眺めると、平城のように見えてしまう。

松山城は賤ヶ岳の戦いで名を馳せ、関ヶ原の戦いで東軍について軍功を上げた加藤嘉明が、築城を始めた城である。四半世紀もかけて完成を目指したが、寛永年間に会津への転封を命ぜられ、松山に残ることを願い出たが、ついに許されることはなかった。嘉明の無念はいかばかりのものだったか。その後、蒲生氏、松平氏が入城する。天明年間に落雷で天守閣などが焼失し、

安政年間に復興したのだという。

本壇と呼ばれる城の中枢は、さらに櫓や廊下、門などで守られている。城の内部には資料も展示されていた。加藤嘉明の甲冑、城の見取り図、城下の絵地図、藩札など。

天主閣の一番上から周囲を見渡した。建物の高さだけではない。高台の上に建っているので、周辺ではこれより高い物はない。敵の襲来がないか、瀬戸内の島々まで見張ることができるし、権威の象徴としてこれにまさる物はない。

二の丸に庭園があるらしいので、天主閣の建つ高台から、急な山道を降りていった。どんどん下っていっても現れない。平地に下りる手前で、庭園が見えたのだが、カラスが鳴いているだけで、人影一つないではないか。

案の定、今日の公開は終わっていた。かつて存在した御殿に合わせて草を植えて、部屋の配置が分かるような工夫がされているということだ。幾何学的な庭園を見て、アラン・レネ監督の映画「去年マリエンバードで」を連想した。芥川龍之介の「藪の中」にヒントを得た作品で、バロック調の城館の前で、嚙(か)み合わない男女の対話が続く。

この庭園は恋人たちの聖地だというが、フランス映画のように、相手の心を探ったり、駆け引きをしたりが、人知れず行われていることだろう。

そのまま下りていくと、ビルの上に宇和島駅という赤い電光掲示板が見えた。松山にどうして宇和島駅か分からなかったが、

愛媛県美術館の建物であり、現代美術家、大竹伸朗(おおたけしんろう)氏が一九九七年に製作した作品だということだ。人々の心を欺(あざむ)くことで、異化作用を引き起こし、意識の覚醒を促すことを意図しているらしい。

伊予鉄道の路面電車に乗ろうと思ったが、そのまま松山市駅まで歩いてしまった。食事にはまだ早いので、道後温泉駅に行ってみることにした。通りを九十度に曲がって進んでいくところが、いかにも路面電車らしい。終点の道後温泉駅には、坊ちゃん列車で走らせる蒸気機関車も停車していた。

かつて道後温泉に来たときの記憶をたどっていた。正面には長い石段があり、伊佐爾波(いさにわ)神社の赤い社(やしろ)が見えた。道後温泉の本館は左に曲がったところにあるはずなのだが、鷺(さぎ)を描いた

けばけばしい現代アートの巨大な覆いが見えた。
道後温泉にふさわしくないと友人が言った。修復工事をしているらしいので、本館は覆いの中にあるのだろう。隙間から建物の一部が覗けた。正面だけは木造の姿が見えたが、神の湯には入れないらしい。若い頃に体験した風呂も、最上階のお休みどころも、覆いに囲まれているというわけだ。やむをえず、道後温泉の新館に行ってみることにした。
右側には椿（つばき）の湯、左側には飛鳥乃温泉（あすかのゆ）があった。どちらがいいか迷ったが、本館同様にお休みどころがある飛鳥乃温泉に入ってみることにした。
まず、二階の大広間休憩室に案内してもらった。そこで説明を受けて、浴衣と帯を受け取った。貴重品のみ袋に入れて、下

の階で着替えることにした。
温泉は二槽あった。一つは結構熱かった。石鎚山（いしづちさん）を描いた壁画には、プロジェクション・マッピングの技術が用いられ、季節の移ろいや夕日が映し出された。アルカリ性で肌はすべすべになったが。もう一つは外気が入ってきたので、湯加減はちょうど良かったが、狭くて人数があまり入れない。時間が押していたので、ほどほどで出て、上の階の大広間休憩室に入った。浴衣姿でつばき花餅を食べた。冷たい緑茶はおかわりさせてもらった。
道後温泉駅には明かりが点（とも）されていた。明治時代の洋館を思わせる駅舎が闇に浮かび上がり、坊っちゃん列車の蒸気機関車

が、夜空を疾走するような空想を抱かせる。
　夜の街を路面電車は走り出した。途中の駅で停車すると、運転手が下りて職員と話している。泥酔したおじいさんが路面に寝ていて、足が線路の上に乗っているので、発車できないというのだ。救急車を呼んでおじいさんをホームに移動させたところで、ようやく出発することができた。
　JR松山駅に戻ってきた。食堂を選んでいる余裕がないので、駅前の店でカツカレーを食べた。実は、今夜泊まるのは松山ではないのだ。明日はしまなみ海道を自転車で走るからだ。
　二十一時五十分発の新居浜（にいはま）行き特急いしづちに乗り、二十二時二十八分に今治駅に到着した。ホテルは駅前にあるJRクレメントイン今治である。ベッドに寝っ転がってインターネットを

見ていた。明日の天気予報は曇のち雨。果たしてサイクリングはできるか？

しまなみ海道を走る

　朝食を食べて一休みし、八時半にはチェックアウトした。今治駅前から小浦（こうら）線のマイクロバスに乗り、展望台入口に向かった。住宅街の細い道を進むと、向こうに真っ白で巨大な橋脚が見えてきた。
　雲は多いものの、薄日が差している。思ったよりは天気がいい。ただ、午後は雨が降ってくるらしい。バスを降りて少し上ったところに、サンライズ糸山（いとやま）はあった。
　電動アシスト自転車の予約は、事前にしておく必要がある。店の人の話では、バッテリーは六時間持つということだったが、できれば大三島（おおみしま）までは行きたいので、平地ではバッテリーを切

ることにした。ただ、ブリジストン製だったので、下りで漕（こ）がなければ充電され、思いの外遠くまで行けることが分かった。
　来島海峡大橋を渡りはじめる。かつて来たときは、しまなみ海道には橋はなく、渡し船で馬島などを巡り、海峡の速い潮を間近で見たものだ。今や馬島には来島海峡大橋の橋脚が立っている。バスと住民だけが島に車で下りることができる。外部の人間はエレベーターで下りるように促される。
　来島海峡大橋を渡りきると、大島にある道の駅よしうみいきいき館で小休止した。ミカンジュースの飲み比べをすることにした。百ミリリットルで三種類。みかんジュースは普通の温州みかんの物のほか、でこたんジュースは甘味と酸味が濃厚、きよみジュースは軽やかな香りがした。僕の好

みでは、個性的なでこたんジュースが一番おいしかった。

しまなみ海道は、自動車道は最短距離を取るが、自転車道は島に下りて一般道を進むことになる。友人は近いルートよりは、西側の海辺を通るルート（大島環状線）を行きたいと言った。彼の自転車は5段変速なのに、僕の方は3段変速でおまけに車輪が小さく、バッテリーの減りが大きかったので、あまり気が進まなかったのだが。

バッテリーを節約モードにすると、本当にペダルが重くて進まない。乗り心地は最悪だった。彼の自転車と交換してもらったら、余りの違いに愕然（がくぜん）とした。そこで、しばらくは交替してもらっていた。ただ、サドルが低かったのも、力が入らなかった原因の一つだった。少し高めにすると、多少は漕ぎやすくな

った。

海辺を遠回りしたために、一時間近く余計に時間がかかった。海峡の向こうに見えるのは、二つ先の島だった。これなら大三島までは行けそうだ。

ずっと曇ったままで、海の色も灰色。すばらしい景色は見られない。ただ、時折、太陽が顔を覗かせたので、これは亡き母の魂が応援してくれているんだろうと思い、感謝の気持ちでいっぱいになった。

伯方島（はかたじま）に渡る橋に向かって上っていくと、小さな蛇が鎌首を上げて、身をくねらせて向かってきた。前にいた友人は「あ、蛇」と絶叫した。アオダイショウだった。それも小柄で細い蛇だった。

「毒蛇だったらどうするの？」
「アオダイショウだよ。毒はないよ。うちの庭にも出てきたし、もっと大きいのが縁の下に入っていったよ」
「蛇が自転車にからまったらどうしようと思ったんだ」
「蛇だってこっちが怖いんだから、襲ってこないよ。毒蛇のハブなんかだったら、向こうから襲ってくるけどね。それは毒を持っているから、相手を倒せると思っているんだよ」
　子供の頃、上野動物園に連れていってもらうと、蛇を早く見たがったことを話した。怖い物見たさだったわけだが。友人はトカゲを含めて、爬虫類（はちゅうるい）が本当に苦手なのだ。
　伯方・大島大橋を渡った。道の駅の所ですでに十一時半を過

ぎていた。伯方島は伯方の塩で有名な島である。鯛塩（たいしお）ラーメンに興味を持ったが、午後二時には本降りになるらしいので、先を急ぐことにした。
　伯方島の南を抜ける形で、大三島大橋を渡った。大三島は三島水軍を守護した大山祇（おおやまづみ）神社が有名だ。ただ、天候が怪しいので、ひたすら進むことにした。この調子でいけば、当初考えた生口島（いくちじま）にも渡れそうな気がしたのだ。生口島に渡れば、尾道から向島、因島までサイクリングしたので、コースすべてを貫通したわけではないが、しまなみ海道のすべての島に渡ったことになる。
　大三島の東海岸を進むと、右側に生口島との海峡にかかる多々羅（たたら）大橋が見えてきた。ペダルを漕ぐ足にも力が入る。

多々羅（たたら）大橋は斜張橋である。ロープをつなぐ三角形の高い塔は、向かい合っているために、真下で手を叩くと反響して大きな音を出す。多々羅大橋の鳴き竜と呼ばれている。日光輪王寺（りんのうじ）の薬師堂（やくしどう）の鳴き竜が有名だが、原理は全く同じである。ためしに声を出してみると、トンネルの中のように響く。今度は手を叩いてみる。パシーン、パシーンと高い音がする。リズムを変えて叩いてみる。それを友人にビデオで撮影してもらった。

多々羅大橋を渡って広島県に入った。生口島の道を進んでいく。恐竜のオブジェがあるところで、友人が引き返そうと言い出した。目標は達成したので、橋の手前まで戻っていったのだが。

冷ややかな風が吹いてきた。海峡を見ると、今までと違って、

暗い雲が近づいているのが分かった。これはまずい！　越えてはいけない一線を越えてしまった気がした。

「この島に来るなって言われているみたいだよ」と友人が言った。空気が今までと全然違うのだ。

橋を渡り始めると、ざあと雨が降ってきた。今までぱらぱら降ってきたのとは違う。全速力で駆け抜けるしかなかった。ただ、橋を渡りきれば、小降りになるのではと思った。

大三島の多々羅しまなみ公園のレストランに入ったのだが、どうも食べたい物がない。それよりも、伯方島で見た鯛塩ラーメンの方が気になった。走り出すと、またぱらぱら来た。何だか、生口島の方から雨が追いかけてくるような。

大三島大橋を渡った。道の駅伯方Ｓ・Ｃパークで鯛塩ラーメ

ンを食べた。鯛の上品なうま味を、伯方の塩が引き立て、レモンが香りを添えていた。五百数十円でこれだけおいしかったので、二人とも満足していた。

伯方島では日が差していたが、走り出すとまたぽつりと雨粒が当たった。伯方・大島大橋を渡り、行きにアオダイショウが出てきた山道に差しかかったので「間もなく蛇が出ます。爬虫類が苦手な方はお気をつけ下さい」と、僕は友人をからかった。今回は現れなかったが。

帰りは行きとは異なり、近道を選ぶことにした。大島の東海岸を進んでいくと、沖には能島（のしま）と鯛崎島（たいざきじま）が見えた。能島には村上水軍の城があったという。

来島海峡大橋の手前、よしうみいきいき館で、またみかんジ

ュースの飲み比べをした。やはり、甘味と酸味が濃厚なでこたんがおいしい。今度は友人も参加したが、爽（さわ）やかなきよみジュースがおいしいと言っていた。

来島海峡大橋を渡り始めると、また雨が降ってきた。逃げても逃げても追いかけてきて、追いつかれてしまいそうだ。ひたすら漕ぎ続けて大橋を渡り、サンライズ糸山で電動アシスト自転車を返却した。バッテリーはまだ50パーセント残っていた。

「降られました？」と聞かれたので、「降られて乾き、また降られって感じです」と答えた。

午後五時近くになっていた。雨は本降りになった。何とかずぶ濡れになるのは免（まぬか）れた。向かいの建物にある風のレストランに入った。雨の中を駅まで歩きたくないので、松山市駅行き

のバスが来るまで、コーヒーとケーキを注文して飲み食いしていた。

　自転車で走り通しだったので、すでに足がガクガクになっていた。曇っていても紫外線が強く、腕を中心に日焼けしていた。

　午後六時過ぎにマイクロバスが来た。お客は他にいなかった。乗り込むとすぐに、友人は居眠りをした。僕は目が冴えてしまって、雨の降る風景を眺めていた。

　今治駅に着いた。二分しかなかったのだが、特急いしづち松山行きに乗ることができた。結構込んでいて、席はばらばらになってしまったが。

　松山駅に着いたものの、中華料理やインド料理は食べたくな

いというので、店を探すうちに、伊予鉄道の松山市駅まで来てしまった。まだ八時半前だというのに、多くの飲食店が閉店していた。地下街でタルタルソースのチキン南蛮（なんばん）を食べた。軟らかくて衣はカリカリで、おいしかったのだが、あまりに分量が多いので腹がはち切れそうになった。

　伊予鉄道の横河原（よこがわら）線に乗った。見奈良（みなら）駅までは駅の数が多かった。運良く雨は上がっていた。無人駅を出て進むと、住宅地だというのに、街灯があまりなくて、足もともぼんやりしか見えない。こんなところにホテルなんかあるのかと思った。

　郊外の量販店が見えてきた。その向かいにあるのが、樹楽（きらく）というホテルで、スーパー銭湯の利楽（りらく）が併設されている。どちらもスーパー銭湯の形式で、リストバンドで決済する。スリッパ

はなく、靴下のままで移動する。
　午後十時半まで部屋で休み、その後温泉に入ることにした。スーパー銭湯としてはかなり広く、浴槽の数も多かった。ジェットバスもあった。サウナはちょっと熱すぎた。泉質は中性温泉だったが、肌はすべすべになった。メタケイ酸が多いためだろう。
　一番気に入ったのは洞窟風呂だった。中は青い光でライトアップされていた。新浦安にある大江戸温泉を思い出した。休憩室はお茶やドリンクが飲み放題、マッサージ器も無料だったが、風呂でゆっくりしていたために、すぐに閉室になってしまった。

伊予鉄道に乗りまくり

　朝七時半過ぎに起きて、温泉に入ることにした。雨が滝のように降っていた。こんな天気では、どこに行ったらいいか、見当がつかなかった。
　十時にチェックアウトしたのだが、十一時の送迎バスに乗るまで、休憩室でのんびりしてもいいことになった。そこで、飲み物を何杯も飲み、全身や足のマッサージをした。図鑑もたくさんあり、一日いても退屈しそうにない。このまま夕方まで過ごしてもいいとさえ思った。
　十一時の送迎バスで、松山市駅まで送ってもらった。伊予鉄道の電車とバスが一日乗り放題の切符（千九百円）があるとい

うので、それを買って郊外電車に乗りまくることにした。
伊予鉄道とＪＲは仲が悪いようだ。松山の中心は予讃線の松山駅よりも、伊予鉄道の松山市駅の方にある。郊外電車は横河原線のほか、郡中（ぐんちゅう）線、高浜（たかはま）線がある。松山市内は道後温泉に向かう路線のほか、数本の路面電車の路線がある。その中心が松山市駅である。
松山にこれほど路線が多いことは意外だった。ＪＲと仲が悪い点では、福岡の西鉄（にしてつ）と似ていると友人が言っていた。福岡の場合も、ＪＲの博多よりも、西鉄の天神（てんじん）の方がにぎわっている。
松山市駅のホームに郡中港行きの電車が止まっていた。ロングシートに座ると、すぐに列車は発車した。郡中線は単線だった。住宅街の間を縫って走っている。終点の郡中港駅近くには、

予讃線の伊予市駅がある。終点に着いたので、港に向かって歩いていくことにした。小雨が降っているので、傘を差しながら。
入江が港となっており、対岸に渡れないため、いったん大通りに戻って、五色浜（ごしきはま）公園に向かった。ここは江戸時代に萬安港（ばんあんこう）として開かれ、郡中港、伊予港と名前を変えたということだ。
萬安港旧灯台を目指していった。日が暮れて港に入る船のために、そこで火を焚いたのだという。江戸時代は木製だったのだが、明治の初めに石造りの今の姿になったのだという。
五色浜という地名は、平家の姫君、五色姫が追っ手から逃れるためにたどり着き、源氏の旗を探して敵の目をくらまそうとしたが、見つからずに落胆し、ここで入水（じゅすい）したからだという。
郡中港駅から郡中線で、松山市駅に戻ってきた。すでに午後

二時近かったので、遅い昼食を取ることにした。料理の値段が高く、友人の気に入る物が見つからない。そこで、昨夜鶏肉料理を食べた地下街へ行き、松山辛麺（からめん）を食べることにした。ただ、宮崎辛麺との違いがよくわからない。川崎のソウルフード「ニュータンタンメン」とも似ている。辛いスープに溶き卵が入っている点も。

　僕は松山辛麺5辛。友人は2辛にしたが、それでも辛いと言っていた。5辛は我慢できる程度の辛さで、汗が猛烈に出た。唐辛子のスープに卵とニラが入っている。

　その後、フリーパスで観覧車に乗れるというので、高島屋の屋上に行った。しかし、外は豪雨で松山城もほとんど見えない。小止みの時だったら良かったのだが。

すでに午後三時を回っていた。高浜行きの電車に乗ることにした。高浜線は複線である。松山市駅を出て、大手町を出た先が、路面電車との平面交差の地点である。金属同士がこすれるガチャガチャガチャという音がする。複線でも車内はガラガラだった。単線の郡中線の方が込んでいた気がする。

　終点が近づくと、海岸近くを走るようになる。梅津寺（ばいしんじ）駅あたりは、すぐ左側が海である。天気が良ければかなり景色が良さそうである。

　梅津寺と高浜の間は、高浜線も単線になる。高浜駅に着いた。松山観光港行きのバスは行ってしまった。正面は港となっている。雨の降りが激しい。トイレに入り、写真を撮って乗ってき

た列車に乗り込んだ。横河原行きである。高浜線と横河原線は直通運転がされているのだ。

　松山市駅と見奈良駅の間は、すでに乗っている。見奈良駅から横河原駅までは初めてだが、住宅地の間を縫って走るだけである。終点の横河原駅の周りは見る物がない。重信川（しげのぶがわ）に近いためにこの地名がつけられたのだろうが、駅からは川の姿も見えない。

　松山市駅に戻ってきた。あとは夕食をどこで食べるかである。十数分後に出る松山空港行きのリムジンバスに乗ることにした。これもフリーパスが使える。本来の運賃は路線バスの倍額だが、直通で快適だった。

　また松山に来るかどうか。道後温泉はもっとゆっくり見たか

った。正岡子規の記念館も、伊佐爾波神社も行く余裕がなかった。奥道後がその後どうなったか、この目で確かめたい気もしたが。

　松山空港で鯛飯（たいめし）のセットを食べた。鯛飯にじゃこ天がついている。鯛飯はそのまま食べてもいいが、ネギと白ゴマ、ワサビを入れて、熱い出汁（だし）をかけて食べると絶品だ。

　東京行きは17時10分発だった。雨がかなり降っている。すぐに離陸できたが、機体に当たる雨の音が気になり、強い風でしばしば横揺れした。これほど荒れた中を飛行するのは久し振りだ。先島（さきしま）に台風がいて、梅雨前線が活発化しているためだった。

　行きとは飛行航路が異なり、本州を避けて南の海上を飛行した。高度一万メートルは晴れていた。

「天気がいいね」と言うと、友人は「高度一万メートルには天気がないんだよ」と笑っていた。たとえ下界に雲があっても、そこはいつも晴れているからだ。

あとがき

三十代の初めに旅行したことをブログにまとめたら、高校二年の時の修学旅行についても、日記をもとにして綴(つづ)ってみようと思った。その頃の記憶や関連する情報を調べてまとめたら、意外に面白いものが出来たようである。それは五十代の自分から見た目があるからで、その間に流れた時間が、旅の印象から夾雑物(きょうざつぶつ)を取り除いただけでなく、若かった頃の感覚も呼び覚ましてくれたからだろう。

四国には高い山もないし、目を見張るような奇景も少ない。鳴門の渦潮と本四連絡橋を除くなら。ただ、その地で出会った人や見た物は、心に深い印象を刻んでいた。人生というものの

価値は、どれだけ多くの思い出を残せたかによるのだろう。
巻末に、ここに記した旅の日程を掲げることにする。

二〇二一年二月二十七日

高野敦志

第一回　一九七九年（昭和五四）

十月二四日　東京駅から新幹線で広島へ。原爆資料館を見学。ホテルの大広間で、被曝者の女性の話を聞く。広島泊。
十月二五日　倉敷の大原美術館を見た後、岡山の後楽園で記念

写真。宇高連絡船で高松に渡る。高松泊。
十月二六日　栗林公園を見学した後、金刀比羅宮に参拝。大歩危峡で昼食。龍河洞を見学する。高知泊。
十月二七日　土讃本線で大歩危峡へ、吉野川で船に乗る。高知城の前で写真を撮る。桂浜に出て、闘犬を見る。高知発大阪行のフェリーに乗船。
十月二八日　大阪港から新大阪駅へ。新幹線で東京に戻る。

第二回　一九九四年（平成六）

七月二二日　倉敷を見た後、瀬戸大橋線で児島駅下車。鷲羽山

泊。
七月二三日　瀬戸大橋線に乗る。崇徳上皇の御陵に参拝。屋島泊。
七月二四日　屋島寺参拝。平賀源内遺品館、四国村見学。屋島泊。
七月二五日　鳴門の渦潮を見るため、観潮船に乗る。小松島泊。
七月二六日　甲浦までは阿佐海岸鉄道阿佐東線に乗る。バスで室戸岬に出て、弘法大師が修行した洞窟に参拝。室戸岬の最御崎寺泊。
七月二七日　高知に出る。高知城、桂浜、闘犬など見て回る。高知泊。
七月二八日　中村に出て、四万十川沿いをサイクリングする。

バスで柏島に出る。柏島泊。
七月二九日　バスで宇和島に移動し、予讃線に乗り換え、松山に出る。松山城見学。道後温泉に入る。松山泊。
七月三〇日　今治城を見学した後、来島海峡で船に乗る。松山に戻った後、奥道後を見て回る。その夜も道後温泉に入る。松山泊。
七月三一日　松山から特急で岡山に出る。新幹線東京行きに乗って帰郷。

前回、四国を旅行してから三十年近い歳月が過ぎていた。三十になったばかりだった自分が、すでに還暦となっていた。晩

年になったとはいえ、意識は若い頃と大して変わっていない。人生というものは瞬く間に過ぎるものだと、改めて感じた次第である。

第三回　二〇二三年（令和五）

五月二十八日　松山城を見学。道後温泉を訪れる。今治泊。
五月二十九日　しまなみ海道を自転車で走る。東温（とうおん）市見奈良泊。
五月三十日　伊予鉄道の郡中線、高浜線、横河原線に乗る。松山空港から帰郷。

二〇二六年六月二十五日

髙野敦志